



特 231

460

叻 谷 搦 謙 著

大聖釋尊

始



時231
460



大聖釋尊

脇谷 擣謙 編



大聖釋尊

目次

一、	誕	生	一		
1	龍	昆	尼	園	一
2	三	十	二	相	五
二、	習	學	八		
1	天	中	天	八	
2	立	太	子	二	
3	出	家	の	兆	四
三、	選	妃	六		
1	三	時	殿	六	

1	使	者	八三
2	歸	郷	八六
3	説	法	八九
1	羅	族	九三
1	羅	羅	九六
2	淨飯王の崩御		九八
3	母及び夫人		一〇〇
1	玉	性	一〇二
1	耶	女	一〇一
2	摩登伽	女	一〇七
3	末利	夫人	一〇四
4	勝蔓	夫人	一一八
5	修摩提	女	一一三
6	快見	女	一一五
7	蓮華色	女	一一六

8	韋提希夫人	一一七
1	阿闍世王	一二四
2	提婆達多	一二八
3	琉璃王	一三〇
1	佛身病あり	一三二
1	入滅の宣言	一三三
2	最後の供養	一三五
1	入滅	一三九
1	最後の弟子	一四九
2	入滅	一七四

以上

大

大聖釋尊

脇谷 搦謙 編

釋迦如來かくれましくて

二千餘年になりたまふ

正像の二時はおほりにき

如來の遺弟悲泣せよ

(親鸞聖人の正像末和讃)

一 誕生

(1) 龍毘尼園

佛教の教主たる大聖釋尊は、中印度迦毘羅衛の城主、淨飯王の嫡子でありま

して、母の摩耶夫人は、隣國拘利の城主、善覺王の姉であります。いづれも印度四姓の随一たる刹帝利種に屬し、釋迦族の後裔であります。

冬も過ぎ春も酣に、寒からず、熱からず、四方に霞たなびきて、花正に盛なる或る夜のことでありました。夫人眠り安らげく、夢まごかなる時、六牙の白象右脇より入りぬと覺へて、それより身重になられました。そこで夫人は、事のよしを、次のやうに大王に申し上げられたのであります。

いにし夜白銀の光ある

六牙の象の我が腹に入る。

夢を見てしその後

くしき事げにぞ多かる。

眼をあげて世を見れば

うるはしくかつひろし。

うまぬする夜半いづこよりか

諸天來りて我を讃む。

胸のおもひみなきえうせて

禪定にあるにさも似たり。

大王よ韋陀を解し

八耀の法にならひ

世の吉凶を辨ふる

聖の人を迎へ來て

この夢のゆゑよしな

いざさく解かせたまへかし。

かくと聞かれた大王は、やがて夢を占ふ婆羅門を召されました。時に婆羅門は、事の始終を聞き已りて次のやうに申しました。

あゝたぐひなきよき夢ぞ

世にもまれなる王子あらん。

この王子もし在家せば

轉輪王となりまさん。

もし出家せば成佛し

甘露の法を世にそゝぎ。

人はおろかぞ諸天にも

ひたぬかづかれたまふべし。

大王これを聞きて歡び限りなく、妙なる衣服、美しき食を以て、あつく彼の

婆羅門に賜ひ、その勞をねぎらはれ、城内には盛宴を張りて、大に祝福せられました。特に夫人の爲めには別殿を設けて、身心を安静にし、ひたすら障りなからん事に、意を用ゐられたのでありました。

かくて事なく十月の間を過ぎましたので、夫人すなはち誕生の近きを知り、大王の許しを得て、多くの侍女と共に、龍毗尼園に遊樂せられました。蓮歩ゆるやかに波叉樹の下を逍遙したまふに、微風徐に吹き來りて、馥郁たる香氣をはなち、樹下の地平かにして掌の如く、草の色紺青にして孔雀の尾の如く、これを踏みこれに觸るゝに、身心いふばかりなく愉快でありました。

時に樹枝の、風に靡きて垂るゝあり、夫人仰いでこれを觀、右手を枝にかけて、いとも端嚴に立ちたまひし時、我等の教主大聖釋尊は、夫人の右脇より安

祥に降誕せられたのでありました。

(2) 三十二相

然るに摩耶夫人には、釋尊御誕生の後、七日にして世を去られましたので、大王は一日殿中に、親族中の年老ひたる、徳高き人々を召されまして、次のやうにはかられました。

この子、嬰孩にして、早くも母を喪ひぬ。何人に寄せてか、乳哺せしめん。

誰か能くこれを影護し憐撫すること、己が子を愛するが如くするものぞ。

時に異口同音に『摩訶波闍波提は、正しく姨母の親あるのみならず、實に慈しみあり、恵みあり、たゞこの人のみ、能く養育するに堪へん』と申されました。かくて波闍波提夫人は、大王の命を奉じて三十二人の母を選び、八母に抱持

せしめ、八母に乳哺せしめ、八母に洗浴せしめ、八母に遊戯せしめ、以て養育の責任を全ふせんことに努められたといふことであります。

當時五通神仙の阿斯陀と名づくる者が、外族の那羅童子と共に雪山の中に居りました。大王は此の仙人を召致して、太子の相を占はさせられました。仙人跪きて、太子を捧げ、つまびらかに観察申上げまして、起ちて、合掌し、恭敬頂禮して、かゝる大丈夫の世に出現せることを、いろ／＼と稱揚いたしました。したが、忽ちにして悲啼懊惱し、歔歔嗚咽して止みません。これを見て、大王並に姨母眷屬も、皆誘はれて啼泣し、共に其の故をたづねました。時に仙人涙を抑へて申すやう。

願くば大王憂慮したまはされ、韋陀論中に記す所によりて考ふるに、王の太子は必定して轉輪王

さならじ、この聖子は、三十二の大人相を具ふるこそ分明顯著なり。これ等の相を具へんものは、諸佛のみ、輪王にあらず、必ず出家して佛道を成るべし。我れ今哀しみ歎くは、異情あるにあらず、佛の興るを觀す、正法を聞かすして、年老いて死期將に至らんとするを、自ら傷むのみ。大王よ。諸佛如來の世に出でたまふことは、猶ほ優曇華の時ありて一たび現はるゝがこそくなるに、我れはこの時を見ず。佛の出世に値ひ、正教を奉持せば、阿羅漢のさとりを得んに、我れはその時にあづからず、この故に悲しむのみ。

大王は、阿斯陀仙人及び那羅童子の爲めに、種々の飯食を設け、上妙の衣服を施して、その勞をねぎらはれました。仙人は、雪山に歸る途すから、那羅童子の肩を撫でつゝ、「童子よ、久しからずして佛出興せん。汝その時、直に往いて出家を請へ、長夜の中に於て、必ず大利益を得べし」と語りました。

大王は、太子の名を悉達多とつけられました。

二習 學

(1) 天 中 天

太子御年八歳になられました。そこで父の王は、群臣宰相を集めまして、國內に誰れか太子の爲めに師傳たるものあるぞと尋ねられました。時に一同は毗奢蜜多羅なるものあり、諸論を知ること最も勝れ、太子の爲めに師匠たるに堪へんと申し上げました。

父の王は、日を卜して毗奢蜜多羅を召されました。時に毗奢蜜多、太子の威徳の崇高なるを見て、座より、起ち身をかゝめて太子の足を頂禮しました。時に父の王は、太子の爲めに學堂をしつらへ、太子を毗奢蜜多に付し、諸の乳

母を留めて太子に侍せしめ、王宮に還られました。

太子先づ毗奢蜜多に尋ねられました。世に梵天の書仙人の書、婆羅門の書、など、すべて六十四種あり、尊者今何の書をか教へたまふと。時に師は默然として答ふるところを知りませんでした。太子また尋ねられました。阿字には何等の義かあると。師また默然として、内に慚愧を懷き、座より起ちて太子の足を禮し、そうして申しました。

『太子生れて行くこと七歩し、

自ら天人中の最尊最勝といへり。

この言虚しからず、

願はくばこれを説きたまへ』と。

時に太子は申されました。この阿字はこれ梵音の聲にして、不可壞を義とし、また無上正眞道の義なり、凡そかくの如きの義、無量無邊なりと。毗奢蜜多これを聞きて、一は歡び、一は慙ぢ、貢高我慢の心を折伏して、太子の徳をたへました。

内に希有の智慧をいただき、

已に一切の論に通じ、

名をだにも我が知らぬ、

六十四の書を知りつくす。

天中天の身をもつて、

猶ほも世法に任せてぞ、

今また更に師を求め、

我が堂にしも入りますか。

(2) 立太子

父の王は、また群臣を集めて、太子を教ふるに堪ふべき武藝の師を求められました。時に諸臣は、善覺王の子提婆を推薦いたしました。提婆は象に跨り車に乗り坎を越へ、馬を御し、射るに妙に、走るに疾く、すべて二十九種の兵法に悉く通じたる人でありました。

やがて父の王は、提婆を召して、太子の師とせられました。提婆、太子を引いて武場に入る。同族の多くの童子も随ひました。そこで提婆は、種々の兵器を出し、太子を教へんといいたしました。時に太子はすべての兵器を見をはりて、悉くこれを棄て、そうして提婆に向ひ申されました。

餘のろくくの釋子に教へよ。我は自らこれを解す。また學ぶを須ぬす。さ。かくて諸の釋子と共に、或は書算、雕刻、音樂、歌舞、染色、圖畫、薰香、手筆、文章より、天文、祭祠、占察、聲論、呪術など、四年の間に於て、皆悉く通達し、自在なることを得られました。時に提婆は太子の徳を次のやうにたへました。

かゝるかよわき年にして、

心のごかのものまなび、

たゞかりそめのそのひまに、

習得たる藝術は、

なべての人が年を積み、

月をかされてひたすらに

學び知りしにたちこえて、
みな悉くすぐれたり。

學問も藝術も、かく健やかに生ひたゝれましたので、父の王は、二月の八日といふ日を卜し、立太子の式を行ふことゝせられました。すなはち當日になりますと、諸の國王、仙人、婆羅門等、召しに應じて諸方より雲の如く集りました。式場には幡蓋を懸け、香を焼き、花を散じ、鐘を鳴し鼓を撃ちて諸の伎樂を爲し、四海の水を盛れる七寶の器を、先づ諸の仙人衆各頂戴し、次に婆羅門に授け、更に諸臣あまねく頂戴し了りて、傳へて王に至れば、王すなはちこれを太子の頂きに灌ぎ、七寶の印を付與して、高聲に

今、薩婆悉達を立て、太子と爲す。

と唱へ、以て式を終はられたのでありました。

(3) 出家の兆

太子年十二になられました。或日父の王は、太子及同族の多くの童子を伴ひ、田植を観られました。時に太子は、愛馬『かんだか』に跨りて、田畝の間を經行せられました。作人みな裸體にして耕耘し、牛を使用するに、行くこと遅ければ鞭撻を加へ、日長けて天熱し、口喘ぎ、汗流れ、人と、牛と、共に飢渴に苦しむさまを、いとも哀れと見られました。また耕されたる土壤の間に、數多き蟲類のうごめくを、人や牛の去りし後、烏雀飛び來りて、争ひ食ふむごたらしきありさまを見られまして、深く愛愁の思ひに沈み、大に慈悲の心を起されました。

あはれ世の衆生、かゝる極苦を受け、其の中に展轉して、これを離るゝを得ざるに、いかでこれらの苦を捨てんことを求めざる。いかで寂靜の智慧を求めざる。いかでか生老病死を脱するの因を念ぜざる。我れ今、いづこにか、閑かなる所を得て、これら苦惱の事を思惟せん。

かくて閻浮樹の影、鬱蒼として天日を蔽ふを見、左右の侍者を去らしめて、獨り樹下に至り、草上に跏趺して、衆生の種々の苦を、一心に思惟せられた。

父の王は、太子のかゝるありさまを見て、曾て阿私陀仙人が『必ず出家して佛道を成るべし』と占ひしを思ひ出で、坐ろに身の毛いよだつを覺へられたことでありました。

三選妃

(1) 三時殿

太子御年十九歳になられました。

父の王は、太子誕生の時に於ける、阿私陀仙人の占ひの事が氣にかゝりまして、如何にもして、出家の志を起さしめないやうにと、そのみに日夜心を配られました。爰に父の王は、太子の爲めに三時殿といふを、新に建造せられました。すなはち嚴冬の時に溫暖殿、炎暑の時に清涼殿、春秋の時に不寒不熱殿を設けられまして、園庭には池沼を掘り、名花を栽ゑ、給侍、調度、それぞれ善美を盡して、ひたすら太子の心を慰むることに、意を用ゐられたのであり

ますが、すこしも太子を樂しましむること無く、面上常に暗雲の浮ぶを見ましては、父の王は、たゞもう心を痛めらるゝばかりでありました。

或時父の王、大臣並に親族を集めまして『汝等かつて知りし如く、太子初生の時の占相に、若し在家せば定めて轉輪聖王とならん。若し出家せば必ず無上道を成就せんといへり。我等いま何の方便を以てか、太子をして出家せざらしむることを得ん』と議られました。時に一同は『大王今當に速かに太子の爲に妃を迎へ、諸の姝女をして侍らしめば、太子は必ず出家せじ、かくて我等釋種は興盛なるを得べし』と答へられました。

時に父の王は申されました『誰が家の女か、其の妃たるに堪ふべき。其の意にかなふ者を知らざれば、選を爲し難し。たゞ太子の意を問ふべきのみ』と。

そこで一同は、太子の所に至りて、いかなる女を以て妃とすべきかを問ひました。時に太子は、七日の後に、其の意を述べしと答へられました。

(2) 理想の妃

欲のあやまち限りなく、

くるしみなやみこれによる。

たのしみ多き宮の中は、

なかくすむにかたきかな。

獨り林の奥に入り、

禪定の中になむべくぞ。

太子は心の中で、かくの如く思はれたのでありましたが。七日を過ぎて後、大悲の心を起し、『蓮花は淤泥の中に生長すれども、而もその爲めに汚れず。衆

生を濟度せんが爲めには、方便以て妻子あるを示すに如す』と思ひかへされました。但し凡庸の女を妃とすべきに非ずとおぼしめして、次のやうにしたゝめて、其の意を陳べられました。

うら若ま年にして、身に威儀あり。すがたのよきをたのみて慢心を起さず。

嫉妬まず、誦はず、誑らず、諸病なく。

恒に質朴にして、慈心あり。凡ての人を憐む事、子を愛するが如く。

恒に眞正の理に心をよせ、身に行ひ、語にあらはし、意に思ふこと、常に清淨に。

舅姑に事ふるこそ父母の如く、左右を愛するこそ自身の如く、夫に後れて睡り、

先んじて起き。能く諸の議理を解するものこそ我妃たれ。

大臣この書を得て、王に上る。そこで父の王は、城内に此の多くの徳を具ふる令女やあると求めしめました。

時に城内女子を持てる人々は『我女こそ、太子の妃たるに堪へたれ』と思ふたことでありますが、父の王の考へられますには、若し太子に諮らずして、女を迎へて妃となし、太子の意にかなはずりせば如何にせん。さればとて、太子に諮りたりとも、決してかくと言ふことでは無からう。さて如何にせんと思ひ煩はれました末に、『多くの寶を盛れる器を作りて太子に與へ、太子をして、その寶を多くの女子に施さしめ、太子の意中、果して誰が邊にあるかを、密かに窺知して、妃を定めん』といふ事に致されました。

そこで父の王は「今より七日の後、我が太子、釋種の諸女に寶を施さんと欲す。皆悉く我が宮門に來集するやう」と城内に唱へしめました。かくて第七日に至り、太子は王宮の門前に出でられまして、集れる諸女に對しそれぞれ

寶を與へられました。時に多の女子は、太子の威徳あまりに崇高なるが爲に、目を舉げて正しく太子を見る者とは一人も無く、たゞ寶を受け、低頭して速に去るものばかりでありました。

(3) 耶輸陀羅

却に拘利城主の善覺王に、耶輸陀羅と名くる、容姿端麗なる女子がありました。が、淨飯王の召に應じて參集しませんでした。父その故を問へば、申しますやう『金帛寶貨は、我が家に在り、いかんぞ彼所に至りて賜るを須ひん。太子も亦寶を施すばかりでは無く、或は選んで妃となさんが爲めであらう』とて、已に寶を施し終れる後、多くの侍女に圍繞せられて、宮門の前に參りました。目を舉げて、遙に太子を正視しつゝ、漸く前み來りて太子に近づくに、恰も舊知の

間の如く、すこしも愧づる色はありませんでした。

『太子よ、今我れに寶を施したまへ』

『汝の來るや遅し、皆悉く施し盡せり』

『我れに何の過ありてか、欺かるゝや』

時に太子は、其の指に着けたる印環の、價ひ百千なるを脱きて、耶輸陀羅女に與へられました。かくて耶輸陀羅女は太子の妃となられたのでありました。

耶輸陀羅初めて宮中に至るに、首を露はし、面を覆はず、淺近なる婦人の儀式を修めませんでした。父の王も之を怪しみ、後宮の侍女達も、婦人の儀式に依るやうにと申したのであります。耶輸陀羅これを聞いていふやう

『瑕疵なくば何ぞ覆ふことを須ひん。行住座臥、皆悉く清淨ならば、たごひ草衣故弊の服を衣るそも、其の體を累はすことなく、唯美麗を増すのみ。若し人惡を懐けば、必ず外の容を飾る。』

かゝる人は甚だ怖畏るべし』と。
父の王はこれを聞きて、大に満悦せられたことのできました。

四 出 家

(一) 老 病 死

太子は、耶輸陀羅妃を納れられてから、十年の間、宮中に在りて、琴瑟相和した、温かき日常を送られたのでありましたが、一日、園林の花盛り、泉池の清涼なるを遊觀せんとて、城の東門を出でられました。時に一老人の頭髮白く、腰曲り、杖によりて、辛くも歩行せるに會はれました。從者に尋ねられまやう。

「彼れは何人ぞ」

「老人なり」

「老人さは何者ぞ」

「曾て嬰兒たり、童子たり、少年たりしも、年月を積みみて、色衰へ、形變り、飲食す、ます、氣力消へ失せ、起つに苦しく、坐るに苦しく、餘命幾ばくも無き者なり」

「老人は彼れのみなるか」

「何人にも免れ難き運命なり」

太子はこれを聞きて、我れも亦、彼れが如き運命を免れ得ざるを念ひ、憂愁の心、内に結んで解けず、遊觀を止めて、駕を還させられました。

少時を経て、復出遊を思ひ立たれ、今回は南門より出でられましたところ、身體は瘦せ衰へ、顔色蒼白にして、呻吟し、喘息し、舉身顛ひ戰きて、自ら持

する能はず、人に扶けられて、路傍に在る者を見られました。常に深宮に在りて未だ曾て斯の如き者を見られたること無き太子は、怪訝に堪へず、從者に尋ねられますやう。

「彼れは何人ぞ」

「病者なり」

「病者さは何ぞ」

「身體の組織に異狀を來し、或は熱を生じ、或は寒を生じ、或は重く、或は軽く、食欲減退し、眠臥安からず、手足あれども自ら動かす能はず、氣息次第に衰へて、遂に絶ゆるに至るものなり」

「我れはかゝる運命より免るゝを得べきか」

「如何なる人も免れ難し」

太子は聞き深き悲怖し、いかんぞ出遊すべきとて、忽ち宮に還り、いつか病に遭遇すべきを思うて、憂愁更に増すばかりでありました。

ほど經て太子は復出遊を思ひ立たれ、今度は西門より出でられました。時に、四人にて輿を擧げ、香華をその上に散布し、男女哀號しつゝ、其後に隨ひ行くに遭はれました。太子は未だ曾つてかゝる異様の行列を御覽に成つたことがありませんので、從者に尋ねられました。

「彼れは何者なるぞ」

「死者なり」

「死さいふは何ぞ」

「氣息絶へ、精神去りて、知ることなく、感ずること無き骸となり、遂に曠野に棄てらるゝたいふ」

「餘人も然るか」

「然り、一切の世人、皆かくの如く、貴きも免れず、賤しきも脱るゝを得ず」

太子は、さきに東門を出で、老者を見、南門を出で、病者に會ひ、今亦西門を出で、死者の葬列に遭はれました。而してこれ等は、一切の世人、誰れとて免れ得ざることなりと聞かれて、大に怖れ戦きたまひ、何ともして此の老病死の苦を離るゝの道を求めんと、日夜思惟に耽られたことでありました。

(2) 深更出門

かくて又太子は、或日出遊を思ひ立たれまして、今回は北門を出られたのでありました。時に髪を剃り、法服を着け鉢を持ち、錫杖を執り、寂靜の相を爲し、大地を凝視しつゝ、行く者に遇はれました。そこで太子は、直接尋ねられ

ました。

「異装を爲す汝はこれ何人ぞ」

「我れはこれ比丘なり」

「比丘さは何ものぞ」

「身に行ひ、口に言ひ、意に思ふ、一切の悪を調伏して、身にも、口にも、意にも、一切の威儀を具へしめ、常に忍辱を行じて、如何なることにも願志を起さず、生きとしいくる衆生を憐むものないふ」

かく言ひ終りて、またもとの如く、大地を凝視しつゝ、何處ともなく去りました。太子已に此の比丘を見、又出家の功德を聞きまして、五欲を厭ふ太子の素志と合致しましたから、坐ろに會心の微笑を洩らされつゝ、これあるかなく、一切諸天人民の中、獨り此の道のみ最も勝る、我當に決定して、この道を修學

すべしと、思ひ定められたことでありました。

太子御年二十九、時は二月七日の眞夜中でありました。耶輸陀羅妃、夢より覺めて、太子に向ひ具さに語られました。それは月の地に墜つるを夢み、齒牙の落つるを夢み、右臂を失ふを夢みたといふのでありました。そうして

「これぞ太子出家の前兆ならずや」

と、愁ひに沈むのでありました。そこで太子は

「月は猶ほ天に在り、齒また落ちず、臂も猶ほ在るではないか、夢はたゞ虚假にして實に非ず、汝更に怖畏を生ぜず、當に安眠すべし」

と申されました。耶輸陀羅妃は、これを聞き已りて、還た靜かに眠られたのでありました。

太子はやがて座より起ち、遍ねく妓女の寢所を見るに、日中美を競ひ、艶を争へる彼等は、今や深き睡りに落ち、甚だしき醜状を爲して居るのでありました。或は全身を露出し、或は鼻涕を洩らし、或は涙を流し、或は涎を垂れ、身體種々に散亂して、狼籍しながら屍の横はれるやうでありました。

太子これを見て厭はしさに堪へず、徐ろに出で、宮殿に向ふに、不夜城の觀ありし宮庭も、今や寂然として暗澹なる燈光の明滅するばかり、其の状恰も丘墓のやうでありました。太子は深く厭離の心を起して、遂に決然として出家の意を定められました。

太子静かに宮殿を出で、御者車匿の所に至り、白馬鞭陟を牽き來るべきを命せられました。時に車匿の申しますやう

「今や遊觀の時にあらず怨敵通り來るを見ず、何の故に此の深夜馬を命じたまふぞ」
太子仰せられけるやう

「汝大怨敵の我等を襲ひ來れるを知らざるか、世上豈に老病死に勝る大怨敵あらんや、速かに白馬を牽き來るべし、空しく時を過なかれ」

君命如何ともしがたく、すなはち白馬を中庭に牽き出しました。太子は馬に近づき、茲に誓ひを立てられました。

我れ若し生老病死、憂悲苦惱を斷たすんば、遂に宮に還らじ。

我れ若し阿耨多羅三藐三菩提を得ず、又法輪を轉する能はずんば、還父王と相見えじ。

我れ若し恩愛の情を絶たすんば、終に還た母后摩訶波闍波提及び耶輸陀羅妃と相見えじ。

かくて白馬に跨り、城門を出で、阿菟耶林に向ひ、天明の頃、跋伽仙人の苦行林に着かれたのでありました。

(3) 孤影入山

太子苦行林に着して、その園林を見るに、寂靜にして諸の誼闊なく、心甚だ歡喜し、即ち馬を下りてその背を撫で、又車匿の勞をも厚くいたはりました、さて寶冠を脱して仰せられますやう。

「車匿よ、此の寶冠を以て大王の足下に致し、我が爲に大王に白せ「我がこゝに来れるは、たゞ生老病死を畏れてこれを斷除せんが爲めのみ」を、父王若し「我が出家は時を得ず」と申されなば、復我れに代りて白せ「老病死の至るは、定まれる時あらず、少壯なりとも焉んぞ免るゝを得ん」と。又大王往日「子あらば出家を許さん」と宣へり。汝我に代りて白せ、「耶輸陀羅久しく已に娠めり、この故に出家の素志を遂ぐるのみ、敢て我意のみより爲せるにあらずと。」

太子はまた身の瓔珞を脱して、車匿に授け、

「汝我が爲に、この瓔珞を以て、母后摩訶波闍波提に奉りて白せ「我れ今諸苦の本を斷たんが爲に、

宮城を出で、此の願を満足せんを欲す、我が爲めに反つて苦しみを生じたまはされ」と。

太子は又耶輸陀羅の爲に、その他の身上の具を脱して車匿に授け

「汝我れに代りて白せ「人の世に愛別離苦なきを得ず、我れ今この諸苦を斷たんが爲に、出家學道するのみ、我が爲の故に恒に憂愁を生ずるなかれ」と。

かくて太子は、健陟を將て疾く宮に還るべきを、車匿に告げ、劍を以て自ら髪を斷ち、身に着けし七寶の衣を脱し「今はこれまで」とて、徐ろに林中に向つて前進せらるゝのでありました。車匿は遠くその影を望み、全く見えざるに至りて、歎歎自ら勝ふる能はず、願て健陟を見れば亦、涕泗交々流れて、愁ひに沈めるさま、見るも哀れでありました。

さてあるべきにあらざれば、涙を拂ひ、太子の影を拜し、悲み嘶く健陟を率

き、寶冠其の他、太子の身に着けられし品々を捧げ、路を尋ねて歸りました。かくて城内は、上下全く憂愁の雲に閉ぢられたのでありましたが、大王は耶輸陀羅妃に對して「自ら愛敬せよ、胎兒をして安穩ならしめよ」と告げ、今はひたすら王孫の安産を期待するより外に、心の向ふべき道は無かつたのでありません。

五 求 道

(1) 跋 伽 仙 人

苦行林に着かれた太子は、こゝで車匿及び犍陟に別れを告げ、孤影悄然として、林中を前進し、跋伽仙人の住處に到られました。彼等仙人の行ふところを

観ますれば、或は草を以て衣と爲すあり、或は樹皮樹葉を以て服と爲すあり、或は唯草木の花實を食ふあり、或は一日一食、或は二日に一食、或は三日に一食、以て自餓の法を行うて居ります。そうして或は水火に事へ、或は日月を奉じ、或は一脚をあげ、或は塵土に臥し、或は荊蕀の上に臥し、或は水火の側に臥して、苦行を續けて居ります。

太子は、かゝる苦行者のありさまを觀て、跋伽仙人に尋ねられました。

「汝等、今此の苦行を修すること、甚だ奇特であるが、何等の果報を求めんとはする」

仙人の申しますやう。

「天に生れんが爲めなり」

太子は之をきゝて、心に思はれました「諸天樂しと雖も、福盡くればまた六道

を輪廻せねばならぬ。商人は寶の爲めに大海に入り、王は國土の爲めに帥を興して相伐つ。今これ等の仙人は、天に生れんが爲めに、此の苦行を修して居るが、終に苦を離るゝことは出来ない』と。かゝる思惟に耽りつゝ一宿せられました。

さて明日になりましてから『諸仙の苦行は、眞正解脱の道に非ず、我今こゝに止まるべからず』とて、仙人と辭別し、更に阿羅邏迦蘭といふ仙人を問はんとて出立せられました。

(2) 瓶沙王の阻止

太子は次第に遊行して、阿羅邏仙人の處に往かれる爲めに、恒河を渡りて、王舎城に着かれました。こゝで太子は、食を乞はんが爲めに城内に入られたの

でありました。

時しも、左右の者と共に、高樓に登りて居られました瓶沙王（頻婆娑羅王）は、遙に太子を見て、これぞ迦毘羅衛城淨飯王の王子で、出家せしと聞きし悉達多太子なることを知り、出て遇はんと思はれました。左右の者をして何所に憩はるゝかを視せしめました。太子は、食を乞ひ畢りてから、槃荼婆山に上り樹下石上に結跏趺坐し、思惟を凝らして居らるゝのでありました。

瓶沙王は、左右の者と共に、太子のところに往き、そうして申されました。

「太子よ御身今は盛年なり、須らく世欲を行ひ、老衰の時を待ちて、出家修行せらるべきである。むかしより諸仙も申された『年少の時には先づ欲事を行ひ、中年には財を求めて自ら養ひ、老老の時に至りて、出家修行すべし』と。たゞひ年少にして道を求むるも、五欲に牽かれて、進み達するこぼさ出来ない、太子よ、願はくばしばらく欲を受よ。若し父王を敬するが爲めに、王位を棄てら

れたのであるならば、我國の半を捧げ、以て共に之を治めん。若し少しきならば、我國の全部を捧げ、我は臣として事ふるであらう。若し復我國を厭はるゝならば、四兵を給したてまつらん、自ら攻伐して他國を取りたまふべし。』

かくの如く、瓶沙王はいろ／＼と言を盡して、太子を勧誘せられたのでありましたが、太子はこれを聞きて、怖れず、驚かず、怪しまず、王の意の在るところは諒とせられたけれども、自ら守るところを動かすべくもありませんから、衷心より、瓶沙王に報答せられました。

『王の御懇情は深く之を領しぬ、されど我れ今既に王位を捨てぬ、亦何によりてか王の國を受くべき。王既に善心を以て國を我に與へらるども、尙ほ受けず、何によりてか四兵を以て他國を伐ち取るべき、我れ今父母と別れ、鬚髮を剃除し、國を捨つる所以は、生老病死の苦を斷んが爲めである。今我が出家する所以は、唯解脱を求めんが爲めである。されば、今我れ王の言に違へりさいへど』

も、願はくは嫌恨を懷きたまはされ。王よ、願はくば正法を以て國を治めたまへ。

かくて太子は、瓶沙王に別れを告げられました。王は太子の去るを見て、深く惆悵し、合掌流涕して申されました。

太子よ、大解脱の爲めに去るさならば、敢て留めじ。唯願はくば、道成るの曉、先づ我れ及び我國人を濟度したまへ。

(3) 苦行六年

かくて太子は、阿羅邏仙人を問ひ、更に鬱陀羅仙人を訪ねて道を求めたけれども、共に無所有所に入り、非想非々想處に入るを以て、究竟の解脱として居るので、心に満足が出来させられない。いふところの非想非々想處には、我ありとするか我なしとするか。若し我なくんば非想非々想處もあられない。若し

我あれば必ず染著するところありて、非想非々想處といふことは出来ない。何ぞ以て究竟の解脱といふことが出来やう。眞の解脱は、我と我想とを悉く除き捨てたところで無くてはならぬ。

太子は更に勝妙の道を求めんが爲めに、尙も前進して、象頭山の南、斯那といふところに、鬱鞞羅梵志を訪ねて、茲に苦行を續けらるゝことになりました。それは、一日に一米一麻を食し、若し乞ふ者あればこれをも施し、或は一日に一米を食し、或は一日に一米を食し、或は復二日乃至七日に一米、一米を食すといふのであります。

かゝる苦行を修せらるゝこと六年の間でありました。太子つらく考へられますやう。

「我れ苦行を修するに六年であるが、身形枯木の如く、徒に消瘦するのみで、未だ解脱を得るに出来ぬ。蓋し道は羸身にして得べきに非ず、須らく身力を恢復して後、方に道を求むべきである。」

かくて尼連禪河に入りて洗浴し、牧女難陀波羅のさゝぐる乳糜を取りて、氣力を充足し、獨り畢波羅樹の下に坐して大誓願をたてられました。

「この樹下に坐して、我道成らずんば終に起たす。」

六成 道

(1) 魔軍襲來

太子が畢波羅樹の下、淨軟草の上に結跏趺坐して、『正覺ならすんば、此の座を起たじ』と誓はれた時でありました。第六天の魔王の宮殿、自然に動搖して

來ましたので、魔王は大に懊惱し寢食も安らかならず、心をもひますやう
沙門瞿曇、今樹下に在り、五欲を捨て、端坐思惟す。久しからずして成道すべし。若し道成らば、
廣く一切を度し、我に超越すべし。道の未だ成らざるに先だち、往いて之を壞亂せん。
魔子の薩陀は、父の顔色尋常ならざるを見て『知らず父の王、何が故に憂感
せらるゝや』とたづねました。魔王具に事の由を告げました。薩陀は父の王を
苦諫して申しました

菩薩は清淨にして三界に超出し、神通智慧明了ならざる無し。これ父の王の能く摧破すべきに非
ず。惡を造りて自ら過咎を招たまはざれ。

魔王に、其の名を染欲、能悦、愛樂といふ三女がありました。形容妖艶能く
人を惑はすこと、天女中の第一と稱せられました。俱に父の前に到り『知らず
父王、何が故に憂愁したまふや』とたづねました。魔王即ち心を披きて三女に

語りますやう

人の世に沙門瞿曇なる者あり。今樹下に在りて端坐思惟し、久しからずして成道せんさす。我れ若
し彼れに如かずして、衆生彼れを信じ、悉く皆彼れに歸依せば、我が土則ち空ならん。この故
に愁ふるのみ。願ふは未だ道の成らざるに及んで、往いて彼れを摧破せんあり。

かくて魔王は、手に弓箭を執り、男女眷屬を伴ひ、畢波羅樹の下に往いて、彼
の太子を見るに、寂然として動かさず、靜かに生死の海を渡らんとするの狀、眉
宇の間に現はれて居ります。

(2) 魔王誘惑

魔王、左手に弓を執り、右手に箭を調べ、太子に向ひ申しますやう

汝利利種、死は甚だ畏るべし、何ぞ速かに起たざる。汝は唯汝が轉輪王の業を修し、出家の法
を捨てよ。汝は是れ利利輪王の種なり、乞士となるは相應せざるころ、今若し起たずんば。唯好

し、本誓のまゝに安坐せよ。我れ試みに汝を射ん。一たび利箭を放てば、何ぞ能く此の毒に堪へん。汝若し速かに起たば安全を得べし。

けれども太子は、怖れず驚かず、泰然として、眉毛一つ動かされませんでした。そこで魔王は、三女を進めて誘惑を試みました。三女太子に向つて申しますやう

仁者、至徳あり、天人の敬ふところ、供待なかるべからず。我等、今年方に盛に、天女の中、端正なるこそ我等に踰ゆるものなし。天今我等を遣はして、相供給せしむ。晨昏の寝臥、願はくば左右に侍らん。

時に太子、静かに三女に告げられました。「汝等、小善を植て天身を得、無常を念はずして、妖媚をなす、形體美なりと雖も、心端しからず、淫惑不善なり。死して必ず鳥獸の身を受くべし、之を免るゝこと甚だ難し。汝等、今我が

定意を亂さんと欲するは、清淨の心に非ず。今便ち去るべし、我れは須ひす」と太子の心、かくの如く堅固なるを見て、魔王今は廣く軍衆を集め、力を以て脅迫するの外無しと爲し、即ち多くの魔軍を呼び集めました。或は戟を執るあり。劔を操るあり。或は頭に大樹を戴き、手に金杵を執るあり。或は諸獸の形を爲すあり。一身多頭なるあり。或は一目なるあり。衆目なるあり。或は其の色土灰の如くなるあり、身より焰を放つあり。之等の魔衆、目を瞋らし、臂を張り、空中に旋轉し、馳走し、咆哮して、太子を脅威すれども、太子の之を觀ること恰も兒戲の如く、遂に太子の一毛も動かすことは出来ませんでした。太子の樹下靜觀を妨ぐる魔王、魔女、魔軍とは、果して何を意味するか、各自に猛省し翫味するところが無くてはなりません。

(3) 五道透視

魔軍退散するや、太子の心、ますく淨く、湛然として動かす。天に雲霧な
風樹葉を動かさず、落日光をどいめて、月中天に澄み、衆星燦として、寸翳
もさはるものなし。太子茲に天眼を得て、世間を觀察し、無量の衆生を徹見す
ること、さながら明鏡の中に、自身の面像を觀るが如くでありました。

かくて地獄の衆生を見るに、或は銅汁を口に灌がれ、或は銅柱を抱き、或は
鐵牀に臥し、或は鐵鑊に煮られ、或は火上に灸られ、或は虎狼鷹犬に食はれ、
或は火を避けて樹下に依れば、墜落せる樹葉、皆刀劍となりて其の身を截り、
或は斧鋏を以て肢體を剔られ、或は煮沸せる河中に投せられ、或は糞尿の坑中
に陥れらる。かくの如き種々の苦を受け、一旦命終するも、業報の爲めに尙

ほ死せず。太子思惟すらく『これもと世間の楽しみに順ひて、惡業を造り、不
善の想ひをなせる果報なり』と。

次に畜生を觀るに、種々の行ひに隨つて、種々の醜形を受く。或は骨肉筋
角、皮牙羽毛の爲に殺され、或は人の爲に重擔を荷負し、飢渴窮乏するも、人
知らず。或は其の鼻を穿かれ或は其の首に鉤し、常に身を以て人に供し、又
同類中に於て互に相噉ふ。太子思惟すらく『もどこれ惡業をなせる果報なり』
と。

次に餓鬼を觀るに、恒に黒闇の中に居て、未だ曾て暫くも日光を觀ず。同類
も亦互に相見ず。其の形長大、腹は大山の如く、咽喉は針の如く、口中恒に火
焰燃え、常に飢渴の爲に苦しむ、千億萬歲、飲食の聲だも聞かず。時に天雨の

其の上(そのうへ)にそゞぐに値(あ)へば、變(へん)じて火珠(ひたま)となり、時(とき)に河海(かかい)に臨(のぞ)めば水化(みづくわ)して熱銅(ねつどう)となり、支體節々(したいふしうくみなごころ)皆(みな)悉(ことごと)く燃(も)ゆ。太子(たいし)思惟(しゆい)すらく、『これ等(ら)皆(みな)慳貪(けんこん)にし、財(さい)を積(つ)み施(ほ)さるの果報(くわほう)なり』と。

次に人間(にんげん)を觀(み)るに、身體(しんたい)十月胎中(つぎだいちゆう)に苦(くる)しみ、生(う)まゝ時外(ときがわ)人に抱擁(ほうよう)せらるゝや、麤澀(そしよく)苦痛(くつう)恰(た)も刀劍(たうけん)に觸(ふ)るゝが如(ごと)く、而(しか)も久(ひさ)しからずして復老死(またらうし)に歸(かへ)り、更に嬰兒(えいじ)となり。五道(ごだう)に輪轉(りんてん)して、自(みづか)ら悟(さと)る能(あた)はず。太子(たいし)見(み)て思惟(しゆい)すらく『かゝる患(わづら)ひあるに、いかにぞ其(その)中(なか)に在(あ)りて五欲(ごよく)に耽着(たんちやく)し、苦(くる)を樂(たの)むと爲(な)して、顛倒(てんだう)の妄見(まうけん)を斷(た)たざるぞ』と。

次に諸天(しよてん)を觀(み)るに、其(その)身清淨(みしよんじやう)にして塵垢(ちんこう)を受(う)けず、或(ある)は須彌山(しゆみせん)の頂(いただき)に居(を)り、或(ある)は須彌(しゆみ)の四邊(へん)に居(を)り、或(ある)は虛空(こくう)の中(なか)に居(を)り、心常(こころつね)に歡悅(くわんげつ)し、天樂(てんがく)を奏(そう)し

て自(みづか)ら娛樂(ごらく)し、晝夜(ちゆうや)を知らず。食飲(おんぢきん)衣服(ふく)、念(ねん)に應(お)うじて至(いた)り、一(ひと)として適(てき)せざるものなし。されども、一旦(たんぷく)福盡(ふくつき)くる時(とき)到(いた)れば、死相(しさう)現(あら)はれ、眷屬(けんぞく)の戀慕(れんぼ)するをみ見て、方(まさ)に大苦惱(だいくなう)を生(し)ず。太子(たいし)思惟(しゆい)すらく『この諸天(しよてん)子(し)も、少善(せうぜん)を修(しゆ)して、樂報(らくほう)を受(う)け、壽命(じゆみん)の長(なが)きを見(み)て常樂(じやうらく)と謂(い)ひ、既(すで)に變壞(へんわい)を見(み)て、大苦惱(だいくなう)を生(し)じ、即(すなは)ち邪見(じゃけん)を起(おこ)して因果(いんぐわ)なしと謗(そし)り、以(もつ)て五道(ごだう)を輪廻(りんね)して、備(つ)さに諸苦(しよく)を受(う)く』と。

太子(たいし)はかくの如(ごと)く五道(ごだう)を觀察(くわんさつ)し、大慈心(だいひしん)を起(おこ)して、自(みづか)ら思惟(しゆい)すらく『三界(がい)の中(うち)、一(ひと)の樂(らく)なし』と。斯(か)く思惟(しゆい)して中夜(ちゆうや)盡(つき)くるに到(いた)り、東天(とうてん)漸(やが)く明相(みやうさう)を現(けん)する時(とき)、一切(さい)の無明(むみやう)を斷盡(だんじん)して、無上(むじやう)正眞道(しやうじんだう)を證(し)り、一切(さい)の衆生(しゆじやう)を、三界(がい)五道(ごだう)の苦(くる)しみより拔濟(はつさい)するの力(ちから)を得(え)て、茲(こゝ)に大聖世尊(だいじやうせそん)、佛陀如來(ぶつたにょらい)となられました。

七 說 法

(1) 商主の供養

魔を降伏し、無上正遍智を證られた大聖釋尊は、七晝夜の間、結跏趺坐して禪定に入り、すでに煩惱を斷じて、解脱の樂を受けられました。此の時に當り誰れ一人として、未だ食を持ちて供養する者はありませんでした。然るに茲に二商主あり、五百輛の車に多くの寶貨を載せ、他國に往かんとして、此の處を經過しました。時に世尊定に入りて、七日の間飲食したまはざるよしを聞き、共に敬虔の誠心を起して、手づから種々の飲食香味を捧げ、世尊の所に至り、頭面もて佛足を禮し、瞻仰して白すやふ

我等、種々の飲食をさとのへ、來りて供養したてまつる、願はくは世尊、慈愍もて納受したまへ。世尊すなはち鉢を持ちて商主の供養を受け、爲めに布施の功德を説きたまふに、商主聞き已りて甚だ慶喜し、佛足を禮して去りました。世尊は鉢を以て、尼連禪河の邊りに往き、岸の上に於て草を敷き、如法を食し已りて菩提樹下に還り、入定して十二緣生を觀察せられました。七晝夜を已りて定より出で、次の如く偈を説かれました。

淨行もて苦相を觀察せん時、一一の法の因る所あるを知らん。

若し苦相の不生なるを知らば、一切の所愛自然に斷ぜん。

淨行もて滅受を觀察せん時、滅受法の無盡なるを知らん。

若し滅受の不生なるを知らば、一切の所愛自然に斷ぜん。

淨行もて緣生を觀察せん時、乃ち緣生法の無盡なるを知らん。

若し縁生の不生なるを知らば、一切の所愛自然に斷ぜん。

淨行もて有漏を觀察せん時、乃ち有漏法の無盡なるを知らん。

若し有漏法の不生なるを知らば、一切の所愛自然に斷ぜん。

淨行もて是の如き法を觀察し、是の如き法の悉く無生なるを知らば。

日の徧れく世間を照すが如く、虚空を行住せんに礙はる所無けん。

淨行もて苦相を觀察し、一一の苦の悉く無生なるを知らば。

煩惱を破壊して餘なきを得んこそ、佛の魔軍を降伏する如くならん。

(2) 五人の比丘

時に世尊は、自らかくの如く念じられました。

我れこゝにありて一切の漏を盡し、作すべき所已に竟り、本願成滿して、甚深の法を得。見難きを能く見、知り難きを能く知る。その義微妙にして、唯佛と佛と能く之を知るあるのみ、若し他の

爲めに説くも、彼れ解する能はずんば、我が法虚しく授け、徒に自ら疲勞して、我が愁惱を益さん。我れ今獨り寂靜處に於て、我が所見の法、安樂の境界を思惟して住せん。

かくて二七日の間、もろくの衆生の、根の上中下及び諸の煩惱の下中上を、心を止めて觀察せられました。さて思惟したまはく『我れ今甘露の法門を開くべし。誰が爲めにか先づこれを説くべき。何人か先づこの法を聞くことを得ん』と。すなはち往昔の阿羅々伽羅摩仙人を憶はれました『彼の仙人は、若し成道せば、我れを度したまへといへり。我れ今彼の仙人の爲めに法を説かん』と思ひ立たれたのでありましたが。彼れ已に命終して七日を経たりと聞き、無常の大事驚くべきこと、正法を聞くことの難きことを、今更の如く痛感せられたのでありました。次には鬱陀羅仙人の事を憶はれたのでありますが、

彼れも亦命終して、已に二七日を経て居つたのでありました。

茲に世尊は、むかし父王大臣の遣はせる、橋陳如等の五人の事を憶はれました。彼れ等五人の者は、太子苦行の時、太子の爲めに勞を執り、太子に承事したものであります。而して彼等今婆羅奈國の鹿野苑中にあると聞かれて、即ち彼等五人の爲めに、先づ法を説くべしとて、菩提樹下の座より起ち、婆羅奈國へと向はれました。既に其の國に至りたまふに橋陳如、摩訶那摩、跋波、阿捨婆闍、跋陀羅の五人は、遙に世尊の來るを見て、共に謂ひました。

沙門瞿曇、苦行を捨て、退き、飲食の樂を受けて、亦道心なし。今我等を尋れてかしこに來る。我等安坐して、之を迎ふるこそなく。亦禮を作し、敬ひ問ふことなかるべし。若し坐せんさせば、自ら其の意のまゝに座を敷くべきのみ。

世尊は、遙かに之を知ろしめしつゝ、黙していたりたまふに、身相魏々として金山の如く、尊貴吉祥の相好具足し、大威徳ありて能く匹儔する者なし。時に五人、世尊の近づくや、威徳加はり臨むを見て、安坐すること能はず、覺えず座より起ちて禮拜奉迎し、互に爲に事を執らずには居られませんでした。或は衣鉢を持つあり。或は水を取りて盥漱に供ふるあり。或は脚を洗ふあり。各前に誓ふところを破りました。けれども、ことさらに世尊を呼びて瞿曇と申しました。世尊、彼等に告げたまはく

汝等我れを見て、起たざるべきを約しつゝ、今何が故に、其の約に違ひて、驚き起つて我が爲めに事を執れるや。

五人の者は、これを聞きて、深く慚愧を生じ、すゝんで白しました。

瞿曇よ。道を行きたまふに疲勞せられざりしや。

世尊は、五人の者に告げられました。

汝等いかんぞ、無上尊に於て、高情を以て姓を喚ぶぞ。我が心は空の如し、諸の毀譽に於て分別するところなきも、たゞ汝等の憍慢は、自ら惡報を招かん。譬へば、子にして父母の名を稱へんば、世間に於て猶ほ不可なるが如し。況んや我は今これ一の父母なるをや。

彼等五人の者は、ますます慚愧を生じて、世尊に白しました。

我等愚癡にして智慧なし。如來の已に正覺を成りたまひしを知らず。我等は如來を以て、道を得ずと思へり。

時に世尊は、彼等に告げられました。

汝等小智を以て、輕々しく我が道の成れるか、成らざるかを量るなけれ。何が故ぞ、身苦にあれば心憊亂し、身樂にあれば情樂着せん、是を以て苦樂ともに道の因にあらず。

かくて世尊は、五人の者の爲めに八正道の法を説かれました。

(3) 四 聖 諦

若し能く苦樂を捨て、中道即ち正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八正道を行ひ、廣く修習せば、心寂靜にして、生老病死の患を離るゝに堪へん。我れ已に中道行に隨順して、阿耨多羅三藐三菩提を成るを得たり。

五人の者は、之れを聞きて大に歡喜し、尊顔を瞻仰して、目暫くも捨てず、世尊は、五人の者の、道を聞くに堪えたるを知らしめして、更に告げられました。

汝等知るべし、人の世は四苦八苦のみ。生苦あり、病苦あり、死苦あり、怨憎會苦あり、求不得苦あり、五陰盛苦あり、失榮樂苦あり、形ある者も、形なき者も、足なき者も、一足なるも、二足四足、多足なるも、一切衆生悉くこれ等の苦あらざるなし。この苦、汝等須らく知るべし。

是等の諸苦は、皆「我」を以て本と爲す。若し衆生ありて、微しく我相を起せば、またこれ等の苦を受ん。貪欲瞋恚及び愚癡の三毒は、皆悉く我の根本より生じ、而してこの三毒は、これ諸苦の因なり。衆生は、これを以て、欲色無色の三有に輪廻す。これは是れ集なり。汝等斷すべし。若し我相及び貪瞋癡を滅せば、諸苦皆これよりして斷ぜん、これは是れ滅なり。汝等證すべし。この滅は、悉く八正道によらざるなし。これ道なり。汝等修すべし。苦は知るべし。集は斷すべし。滅は證すべし。道は修すべし。我に已に苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修せるが故に、無上道を得たり。この苦集滅道を四聖諦といふ若し人、これ等の四聖諦を知らずんば、此の人解脱を得ず。若し能くこの四諦眞實の道に於て了覺を得ば、當來決定して無上正等正覺を證せん。

茲に五人の者は、四聖諦に於て解知することを得たるを以て、佛足を頂禮して、世尊に白しました。

我等五人、今佛法に於て、出家し、修道せんを欲す。唯願はくば世尊よ。慈悲哀愍を以て、聽許したまへ。

時に世尊、彼等五人を喚んで「善來比丘」と宣ひ、落髮して、袈裟を身に着けしめ、沙門とせられました。是に於て如來を佛寶とし、四聖諦を法寶とし、五人の比丘を僧寶として三寶の名、茲に具足し、成就いたしました。

八大衆

(1) 耶舎

世尊は、五人の比丘と共に、暫らく縛羅迦河岸に住まわれました。時に波羅奈國、俱梨迦長者の子に、耶舎といふがありました。家に巨萬の富

を有し、一門眷屬、皆豪族にして、國中に其の強盛を誇つて居りました。長者子耶舎、一日自邸に於て、美容盛装の妓女をして、奏樂し、舞踊せしめ、もろくの眷屬と共に、置酒交歡して夜を徹しました。天明に及びて、妓女等各自その房室に還りて眠りに就きました。

耶舎後に至り、庫藏を檢察し、諸房室を巡視せしに、妓女等、身に拘束なく、或は髻髮蓬の如く亂れ、或は衣服身を離れて體を露はし、仰ぐもの、俯くもの、さながら死屍の如く、目もあてられぬ醜態を呈して居りました。耶舎このさまを觀るや、忽ち厭惡の心を生じて、恰も狂せるが如く、乃ち城門を出で、縛羅河岸に至り『われ苦し、われ苦し』と叫びつゝ狂奔しました。時に世尊は、向ふの河岸にて晨の經行をして居られましたのを、耶舎遙かに

見まゐらするに、威容端嚴の聖姿、たゞ人ならずと思惟しまして『聖者よ、われ苦し、われ苦し』と訴へました。世尊これを聽こしめされて、哀愍の至情を寄せられ、柔軟の御聲にて

善男子、我れに來れ、今この處安樂なり

と呼ばれました。時に耶舎、世尊の慈悲の御聲にて呼びたまふを聞き、河を渡りて佛所に詣り佛足を頂禮して、懇に其の誨へを受けました。世尊の説きたまふところは、次の如くでありました。

天は五欲自在なりと雖も、輪廻未だ斷ぜず、天福を喜び、樂む心を生ずる勿れ、汝今煩惱を斷じ、罪障を除きて、解脱を得んご欲せば、須らく正道を修習すべし。

耶舎よ、我れ今汝に問はん。色はこれ常なるか、常ならざるか。これ苦なるか、苦ならざるか。こ

れ空なるか空ならざるか。我あるか、我なきか。受想行識はこれ常なるか、常ならざるか。これ苦なるか、苦ならざるか。これ空なるか、空ならざるか。我あるか、我なきか。汝これを知れりや不や。

耶舎答へまつるやう

世尊よ、色受想行識は、實にこれ無常なり、苦なり、空なり、無我なり。

耶舎はやがて、諸法に於て執着を遠離し、世尊を敬禮して、啓白しました。

世尊よ、願はくば我に出家を聽させたまへ。

世尊これを許容して、耶舎たちどころに落髮し、身に袈裟を着けて、沙門となり、佛弟子中に加はりました。耶舎の出家によりて、其の父母も亦三歸五戒を受け、最初の在家佛弟子、すなはち優婆塞、優婆夷となりました。かくて一門眷屬、皆佛説を聞き、歡喜信受して、法雨に沾ふたことでありました。

耶舎に四人の交友がありました。一を満足といひ、二を善博といひ、三を離垢といひ、四を牛主と申しました。耶舎の出家を聞きて、共に佛所に詣り、聞法持戒して出家し、佛弟子中に加はりました。其の他の交友五十人も、風を望みて馳せ參じ、皆出家して佛弟子となりました。

(2) 三 迦 葉

當時尼連禪河の邊りに優樓頻螺迦葉といふ、勇健なる事火の波羅門がありまして、五百の弟子を有し、國王吏民、上下一般より、無二の仰崇を受けて居りました。世尊は先づ彼れを教化して、佛法を信樂せしめなば、その餘の人も、皆隨つて歸入すべしと思召されて、或日將に暮れんとする頃、彼れの住處をおとなはれました。

迦葉の云く

年少沙門、いづこよりか來れる。

世尊言く

我れ婆羅奈より、摩竭提國に向ふ、日既に暮なんぞす、一宿を請はんが爲めに來れり。

迦葉云く

宿るはよし。たゞ諸の房舎には悉く弟子あり。獨り極淨なる石室あり、我が火に事ふるの具、皆この中に在り。甚だ寂靜なれども、惡龍ありて其の内に居る、恐らくは害を加へん。

世尊言く

惡龍あるとも、たゞ借されよ。

迦葉云く

其の性兇暴なり、必ず害を加へん。惜むにあらす。

世尊言く

たゞ借したまへ、必ず煩はさじ。

迦葉の云く

若し能くさゞまり得べくんば、意のままに爲したまへ。

そこで世尊は、其の夜、彼の石室に入り、結跏趺坐して三昧に入られました。かくて此所に止まること四夜に及びましたけれども、世尊の御身に、何等の異状もあらせられませんでした。迦葉はこの奇瑞を未曾有なりと嘆じ、その何故なるかを問ひたてまつりました。時に世尊は

我れ内心清淨なることを得たり、故に外の災禍に害せられざるなり

とて、更に廣く四聖諦の法を説き聞かせられました。迦葉聞き已りて、遂に佛

法に歸し、五百の弟子と共に、出家して世尊の弟子となりました。是に於て火に事ふるの具は、悉く尼連禪河に棄て、師弟共に、世尊に隨從して去りました。

迦葉に二人の弟がありました。一を那提迦葉と名け、二を伽耶迦葉と申しました。各二百五十の弟子を有して、尼連禪河の下流の邊りに住して居りました。一日、兄及び其の弟子等の火に事ふるの具、上流より流れ來るを見て、大に驚き『我が兄に何の不祥事か起れる、火に事ふるの具、皆水に隨つて流る、或は悪人の爲めに、害を受けたるに非ざるか』と、二弟相携へて流れを派り、兄の住處に到り見れば空寂にして、人影一つありませんでした。さてこそ一大事と、四方に推尋して、知人に其の安否を問へば『汝の兄優樓頻羅迦葉は、諸

弟子と共に、火に事ふるの具を棄て、皆悉く瞿曇の所に往きて出家せり』といふ。時に二弟共に未曾有なりと怪しみ、謂へらく『いかんぞ事火の法を棄て、更に他の法をか求むる』と、馳せて兄の所に到り見れば、師弟共に鬚髪を剃除して、身に袈裟を着けて、佛弟子となつて居りました。

兄よ、智慧聰明にして等しきもの無く、名十方に聞へ、崇敬せられざるなし。何が故ぞ、今自ら此の道を棄て、還つて人に從つて學ぶぞ。

と詰れば

我れ今國王臣民に崇敬せられ、智辯他に劣らじと雖も、未だ生死の道を絶てるに非ず。唯世尊の説きたまふところの法のみ、永く生死を離るゝの道なり。是れを以て、我れ今佛法の中に於て、出家し修道するなり

と告げました。そこで二弟は

我等の修得せるところは、皆是れ兄の力のみ。兄今既に佛に從つて出家す、我等も亦兄に隨は

んとて、各其の弟子を將て、共に出家して世尊の弟子となりました。

(3) 舍利弗、目連、大迦葉

時に王舍城中に、二人の婆羅門がありました。聰明利根にして、諸の書論に通達せざる無く、辯才論議、能く及ぶもの無き、大智の人でありました。一を舍利弗といひ、二を目連と申して、各一百の弟子を有し、普く國人の崇敬を受けて居りました。二人は頗る親しき友でありまして、互に敬愛し、若し先づ勝法を聞かんものは、かならず相開悟して、惜しむところなからん事を、誓約して居りました。

或日、五比丘の一人阿捨婆者、鉢を持して村に入り、行乞して居りました。舍利弗路次にてこれに遇ふ。見れば能く諸根を攝し、威儀庠序あり、行きかふる路人、皆恭敬禮拜して過ぎました。舍利弗大に欽仰し、歡喜の情に堪へず、すなはち歩を停めて尋ねました。

見れば、新なる出家なるに似たり。而も能く諸根を攝するこそ此の如し、汝が大師、其の名は何ぞ、何の法を以てか教へたまへる。

阿捨婆者安祥として答ふるやう。

我が大師は、一切智を得て、天人の師たり、相好も、智慧も、神通力も、これぞ等しきもの無し。我れ幼年にして道を學ぶ。日なほ淺し、いかで妙法を宣説せん。たゞ如來より聞くところを述べん。

世にありさあらゆるものほみな、因縁よりぞあらはる。

主あるにあらす知らん時、

眞實の道そこにあり。

舍利弗これを聞きて、大に覺醒するところあり、謂へらく『我が先に修するところは、決定して邪因なり、邪因にあらすんば無因なり、轉た煩惱を増して、能く除くところなし。今や如來の教へたまふ因縁法を聞きて、無我の智開明することを得たり』とて、阿捨婆耆を敬禮して住處に還り、事のよしを目撃連に告げ、各弟子を將て佛所に詣りました。世尊ために廣く四諦の法を説きたまふに、二人及び二百の弟子、聞き已りて出家し、佛弟子となりました。

當時また偷羅厥叉國に、迦葉といふ婆羅門がありました。身に三十二相をそなへ、智慧聰明にして、四毘陀を誦し、一切の書論通達せざるなく、家大に富

み、常に布施を行つて居りました。其の夫人の容姿端正なること、舉國無雙と稱せられて居りましたが、夫妻共に欲想あること無く、未だ曾て室を同じくして寝ねしこと無く、世間の五欲を厭惡して、常に精勤に出家の法を求めて居りました。

時に、世尊既に出家して道を學び、一切智を成就して、千二百五十の大衆と共に、王舍城の竹林中に住したまふと聞き、大に歡喜して、かしこに詣り、五體を地に投じて、世尊に白しました。

世尊は實に是れ一切智なり、慈悲を以て衆生を濟度したまふ、實に是れ一切の歸依處なり。

世尊は是れ我が大師、我は是れ弟子なり。

是の如くいふもの三たびせし後、世尊は彼れに告げられました。

善い哉迦葉よ、甚だ快し。我は是れ汝が師なり、汝は是れ我が弟子なり。

かくて世尊の説きたまふところを聞き、諸の深法を領解して、四無礙辯を成じ、大徳普ねく世に知られましたので、大迦葉と稱せらるゝやうになりました。

舍利弗、目連、大迦葉の三人、もとは我と身とを異なれるものとし、或は我即ち身なりとし、我及び我所に固く執着して居りましたが、今やこの執着を全く遠離して、此の身は衆苦の蕪聚、苦の外には何もものも無しと知るとを得ました。又無常不淨の想によりて永く貪愛を離れ。怨親によりて異想なく、慈心平等の念によりて瞋恚の毒を消し。諸法のうえに明了の智慧を得て、永く癡冥の闇を離れたのであります。かゝる三弟子の、世尊に常侍することは、月に列侍す

る三星のやうだと、たゝえられたことでありました。

九 精 舍

(1) 頻婆娑羅王

世尊は、迦葉等師弟千人の者を度し己はられてから、彼等と俱に、伽耶山頂に往かれて、彼等の心に應じ火を譬へとして、種々に説法せられました。

時に摩竭陀國の頻婆娑羅王は、左右近臣を顧て、これに告げて申さるゝやう『汝、伽耶山頂の世尊の所に往き、我れに代りて恭敬禮拜し、世尊を請じたてまつれ、世尊願はくば宮城に降臨して、我れ及び人民をして、大利樂を獲せしめたまへ。唯願はくば世尊、聖衆と俱に降臨したまへ、この生を盡して飲

食、湯藥、臥具、衣服等を奉り、一切の供給、缺乏せしめたてまつらじ、願はくば大慈悲を以て降臨したまへ』とかくて使者、伽耶山頂の佛所に詣り、具さに王の意を申し述べました。

時に世尊、心に念じたまふやう。頻婆娑羅王、むかし、道若し成らば、願はくば先づ度せられよといへり。今や時到期ぬ、かしこに往きて、其の本願を満たしむべし』と。即ち迦葉等千人の比丘衆と共に、漸く王舍城に近づきたまふや、王は大臣百官及び人民と共に、途まで御迎ひ申し上げました。大衆の中には、王がかねて聚落を給したる優樓頻螺迦葉が、その弟子と共に沙門となり、佛の左右を圍繞して居りましたので、人民皆驚異の眼をみはつたことでありました。世尊は、大王及び人民の、求法の心決定して、狐疑するところ無きこと

を知らしめし、爲めに正法を説いて聞かせられました。

(2) 竹林精舍

頻婆娑羅王は、世尊の説法を聞き、心眼開き、諸法に於て塵垢を離るゝことが出来ました。かくて世尊に白し上げますやふ『世尊は、轉輪聖王の位を捨て、出家學道し、一切智を成就したまへり。我れ昔愚癡にして、世尊を留めて小國を治められんことを願へり。今慈顔を觀たてまつり、また正法を聞きて、方に慚愧を懷き、昔の過ちを追悔す、唯願はくば世尊、大慈悲を以て我が慚悔を受けさせたまへ、我れ昔世尊に白して、若し道を得ば、先づ我れを度せられよと願へり。今日始めて世尊の教を受け、宿願を遂ぐることを得たり。我れ今日より、世尊及び比丘衆を供養して、飯食衣服臥具湯藥等に於て、乏しきこと

なからしめん。唯願はくば世尊竹林に住まりて、我が摩竭陀國民をして、長夜の眠りを覺まさしめたまへ』と。

かくて大王は、諸臣に命じて、迦蘭陀竹林に諸の堂舎を建立せしめ、種々の嚴飾、悉く皆辨じて後、世尊及び大衆を、屈請したてまつりました。世尊もろくの比丘衆と俱に、竹林精舎に入りたまひ、偈を説きて王に告げたまはく

布施はこれ慳貪を去り、

忍辱は瞋恚を離れ、

造善は愚癡に遠ざかる、

この三は涅槃の門なり。

布施すべき財寶なきもの、

布施をなす人を見て、

心よりこれを隨喜せば、

その報布施せんに同じ。

當時諸王の中にて、世尊を供養したてまつるは、頻婆娑羅王を以てはじめと爲し、僧伽藍もまた此の竹林精舎が始めてありました。

(3) 給孤獨長者

王舎城に一の長者がありました。世尊及び大衆を請じて供養せんとて、その前夜、一門眷屬及び奴婢等、夜を徹して飲食香花等の用意をして居りました。時に舍衛國の給孤獨長者、事ありて王舎城に來り、此の長者の家に止宿いたしました。見れば家中の老幼、皆寝ねずして、飲食珍饌の準備をいたして居りま

すので、怪しみ尋ねました。

「何の爲めに斯は忙し、王を請ぜんが爲めか、大臣を請ぜんが爲めか、又は如親の爲めか」

「然らず、今、佛あり世に出で、一千の大衆と共に此の國に遊化し、王及び大臣士庶、悉く皆歸向し、次第に供養したてまつる。我れ亦彼の佛及び大衆の爲めに、明日齋を設げんさす、之によりて廢れざるなり」

「我が如きもの、彼の佛及び大衆を見たてまつることを得べきか」

「明旦、こそくく來りて、我家に食を受たまふ、此の時を以て見たてまつるべし」

かくと聞きたる給孤獨長者は、歡喜踊躍して、明旦まで待つことを得ず、夜もすがら佛所に詣らんとて門を出でました。往きて寒林に向ふに、時方に夜半、月朗かに中空に懸れる下、遙に世尊及び大衆の經行したまへるを拜しました。漸く近づくに、威徳相好、常の人に同じからず、長者すなはち前んで佛足

を頂禮し、一面に座して法を聽かんことを願ひました。世尊爲めに廣く善惡邪正の法に就て、分明に説示せられました。長者聞きて永へに疑惑を斷じ、正法に於て深信堅固なることを得ました。時に世尊長者に問はるゝやう

「汝の名字は」

「我れ國中に於て、少しく資産あり、貧苦孤獨の者、來りて乞ひ求むれば、常に飲食臥具を施すを以て、國人我れを呼びて給孤獨と爲す」

「汝の國は」

「北方の舍衛國なり。世尊願ば大衆と共に、我國に來らせたまへ、我れ衣服飲食臥具湯藥一切の受用、生を畢るまで施したてまつるべし」

「長者よ、我れと大衆と、その數千人を踰ゆ、かしこに精舍なくんば、安住するを得ず」

「世尊若し降臨したまはば、速かに建立すべし。唯願はくば我が請ひに違ひたまはざれ」

世尊は、長者が染着なく、大施を發して正法を護らんとする意あるを知ろしめして、爲に説き聞かしめられました。

長者よ、汝已に眞諦を見て、素より施を好む、錢財は常寶にあらず、宜く速かに施を爲すべし。施すものは衆に愛せられ、善稱廣く流れ、善良なる者その友たらんことを樂び命終に臨むも、心常に歡び、悔ひもなく亦怖れもなし。六趣の輪廻の中に於て、良伴たるものは施に過るなし。不堅固の財を施して、堅固の果報を獲よ。布施するもの、中に、或は五欲を求めんが爲めにするものあり、或は大財を求めんが爲にするものあり。或は名聞の爲めなるあり、或は生天の樂を求めんが爲めなるあり。唯汝が無想の施は、施中の最上なるもの、利として獲られざるなけん。

長者佛の教へを受け、歡喜踊躍し、恭敬禮拜して去りました。

(4) 祇園精舍

かくて長者は、王舍城に歸り、事畢りて舍衛國に還り、精舍建立の爲めに、

殊勝清淨の地を求めました。爰に祇陀童子の所有にかゝる園苑がありました。地寬廣にして諸の穢惡なく、竹樹蔭翳として、泉池清淨に寒風暑氣ともに侵さず、王城を距ることも遠くないので、精舍建立には、この地を最も勝れたりと爲し、乃ち童子の所に到り、旨を告げてその價格を問ひました。

然るに祇陀童子は、この勝地を手離す意志がありませんので、長者の要求を思ひ止まらしめんとて『君若し金を滿庭に布かば、彼の園苑を讓與すべし』と申されました。ところが長者は、即日象馬車乘に黄金を滿載して、彼の庭園に運搬して布きはじめた。これを見たる童子は、頗る奇特の想ひを爲し『長者が、是の如き大財を捨て、佛及び大衆の爲めに精舍を建立することは、たい事で無い。曾て聞いたことがある、若し佛の出世なくんば、一切衆生正法を聞くこ

とを得ずと。されば我れも亦長者の施を助けて、佛及び大衆を供養したてまつらん』とて、此の旨を長者に申し出でました。

そこで長者は、童子と協力して、十六の殿堂、六十の小堂を建て、其の中に一切の受用を備へました。そして又舍衛國より、王舍城に至るの間、處々に佛及び大衆の止宿せらるゝ房舎を造り、かくて人を遣はし、御請待申し上げました。

建つるころの精舎、今日に嚴飾備はりぬ、願はくば佛及び、大衆降臨したまへ、此の生を盡して衣食湯薬隊具等、種々の受用缺乏せしめざるべし。

時に世尊は、大衆に前後を圍繞せられ、次第に行化して舍衛國に向はれました。長者は多くの眷屬と共に遠くまで迎へまして、やがて精舎に御案内申し上げ

げたのであります。

世尊寶座に昇り、大衆皆座に就くや、長者すなはち金瓶を取りて、世尊の手に灌ぎまつり、精舎に名を立てたまはんことを願ひました。時に祇陀童子も亦會中に在りましたので、世尊は其の意を知ろしめし『祇樹給孤獨園』と名づけられました。

一〇 歸 郷

(一) 使 者

世尊祇園精舎にましくて、説法教化せられし時、舍衛國主勝軍大王(波斯匿)は、佛所に至つて化導を受け、深信受して、堅く歸向せられました。時

に勝軍王は、使を遣はして書を迦毘羅城の淨飯王に送つて申されました。

卿が太子悉達多、今正に無上甘露の法味を證りて、世間の者、出世間の者、皆悉く濟度を蒙る云々。

淨飯王は之を見て、思案せられました『我が子の已に正覺を成りたるを喜ぶと雖も、今若し使を遣はさば、定めて之を化して出家せしめん』さて如何にせんと悶へて居られました。時に大臣優陀夷、王の是の如きを見て、其の何故なるかを問はれました。時に王の申さるゝやう

我れ今思ふ所あり。勝軍大王書を送り我れに報す。太子已に正覺を成りて、舍衛國給孤獨園に在り。千の弟子ありて皆阿羅漢なりき。我れ昔し、彼が苦行の爲に去りし時、人を遣はして、尋ね求めしに、使者今に至りて廻らず。今若し使を遣はさば、また定めて復らじ。彼れ悉達多、聰明智慧こそよく人に過ぎ、其の言ふところ信ぜられざる無し。我れこの事を思慮するのみ。

時に優陀夷は進みて『臣今、請ふ行かん。願はくは慮りを爲す勿れ』と申し上げました。そこで王は、次のやうに書をしたゝめられました。

汝煩惱を厭ひ、出家せるは、無上正等正覺を求めんが爲なりき。今已に成道して衆生を教化す。他人は樂を得て唯我れのみ苦惱す。昔しいへり、無上菩提、寂靜の道を證らすんば、誓つて再び迦毘羅城に入らじと。大行已に成りぬ。我れ及び眷屬等を慰むべし。

優陀夷は、王書を受けて、直に佛所に至りました。佛の相好を見て身心愉快し、佛足を頂禮して、父王の書を捧げました。時に世尊はまをされました。

『父王起居安きや否や』

『大王恙なし。唯世尊のみ思ふ』

『汝この道を樂むや否や』

『甚だ樂し、世尊よ』

此に於て世尊は、優陀夷を度して沙門たらしめ、これに法と戒とを授けられました。優陀夷念ふやう『今弟子となる、復還るに縁なし、大王は消息を須ちたまふ、誰によりてか命を報せん』。世尊その心念を知らしめして、優陀夷に告げられました。

「還らんせば、行けよ。世業に親しみ、故家に戀著するなかれ」

「佛還りて迦毘羅城に至らせらるべきや不や」

「還るべし」

「何の日に至るべきや」

「今より後七日、必ず至らん」

優陀夷は歡喜して、佛を禮して去りました。

(2) 歸 郷

優陀夷、還りて迦毘羅城に至り、宮門にて通を求む。門監王に至りて此の旨を言上しました。時に王のまをされますやう『われ優陀夷を望むこと。渴せるもの、飲まんとする如し何が故に、門に停まりて通を求むるぞ』すなはち直に之を召されましたが、反覆三たびに至りて、始めて王の前に進みました。王は、優陀夷が已に法服を着けたるを見て、たづねられました。

「卿、沙門となれりや」

「已に佛法に服しむ」

「太子の宮にある、卿を獨り親しみ、出入周旋、關するところなかりき。今、使ひして還り來り、何が故に、門に至りて外より通を求むるや」

「佛、比丘に教へたまふ、白衣に親しむなけれ、家居を戀ふるなかれ、道俗異なるが故に」

「太子の宮にあるや、衣服極めて好妙なりき、今道を成じて、著くるところ何の衣ぞ」

『服するところ此の如し』(着衣を指して)

『太子の宮にあるや、われ爲に宮を作り、七寶もて刻鏤し、世の珍妙を極めぬ。今の居室はいかん』

『常に樹下に處りたまふ。諸佛の道法皆爾り』

『太子の宮にある、錦繡の茵褥に坐せり、今の坐具は』

『草を用ひ、清素もて食を除きたまふ』

『昔しは甘肥の衆美を飲食せり、今は如何』

『時至るや鉢を持ちて行乞し、食の麁細によらず、施家のために念願したまふ』

王は、太子の日常委細を聞きて、涙を流されました。かくて世尊の歸郷したまふ日時は近づきました。先に遣はせる伺候の人々、馳還りて、世尊今や千の弟子に圍繞せられて王舍城を出で、迦毘羅城に向はれる由を言上いたしました。

淨飯王大に歡喜し、擧國の士庶を従へて、出で迎へられました。漸く近づきて、遙に佛を見れば、光相昔の容姿に倍し、その大衆中にあるは、恰も梵天王のやうでありました。王すなはち車を下りて、徐ろに進み、佛顔を瞻て欣び内に涌き、何といふべきかを知らず、佛も亦默然として、やゝ久しういたしました。

(3) 説 法

淨飯王は、遂に堪へずしてまをされました。

我身を顧るに、居俗の累を食り、子、今や超然道を悟る。子なりさはいへ、道の尊きに居る、何の名を以て呼ぶべきかを知らず。

久しき間、思ひて渴せるの情、今日宣ふるに由なきを、子今默然として、容を改めず、感情な

きに似たるは如何。久しく渴せる人の、路に清冷の泉に逢ひ、これを飲まんとして、奔りて泉に臨めば、忽ちに枯渴するが如し。子の顔は本のまなれども、情を抑て氣高く、對目するも歡の色なく、我れをして獨り悲しましむ。

子は四天下に王たるこそ、猶古の曼陀王の如くなるべかりしに、今食を乞ひて活くるは如何。子は須彌の如き安靜と、日月の如き光相と、牛王の如き歩行と、師子の如き無畏とを具へしに、四天の封を受ずして、食を乞ひて、身を養ふは如何。この道何ぞ榮とするに足らん。

世尊は、父王の心に、猶子の想ひを存するを知り、その心を開かんが爲に、懇に父王の爲に説法せられました。

我れ、王の心の憂悲を増すは、子に對する慈念より起るを知る。あはれ速かに纏綿たるこの愛念を徐減し、その心を靜かにして、我が法を受たまふべし。世ありて以來、人の子の未だ奉ぜざるこそ、法の法、今以て父王に奉じまつらん。世の父、未だ子より得たるものなきに、今や勝妙甘露の道を、

子より得たまふ。人の世の一切は、自業の果報ならざる無し。業果の身に業を造りて、更に新なる生を受く。當に業の因果を知りて、勤めて度世の業を習ふべし。

諦かに世間を觀するに、唯業のみ良朋と爲す。肉身乃至親戚は、深く我を愛慕するも、命一たび終るや、神獨り往きて、肉身隨はず、乃至親戚從はず、唯業のみ良朋として之に隨ひ、以て五趣に輪廻せしむ。

當に力を竭して身口の業を淨め、晝夜勤めて修習して亂心を息むべし。己を利するは唯これのみ、この外のもの悉く非なり。

涅槃を最も安しと爲す、禪寂は樂中の勝たり。人王五欲の樂は危險にして恐怖多きこそ、毒蛇と同居する如し、明人は世間を見るこそ、盛火に圍繞せられて、恐怖して暫くも安きこそなきが如く、速かに生死を離れんことを求む。

無盡寂靜の處は、慧者の居る所。貪嗔癡を調伏せば、利器象馬兵車を須たすして、天下に敵ある

を見ず。

苦を知りて苦の因を斷じ、道を修めて滅を證し、正に四眞諦を覺る時、惡趣の恐怖除かれん。

淨飯王は、聞きて心大に歡喜し、信樂の情深く合掌して讚歎せられました。

奇なる哉誓果成り、奇なる哉大苦を離れ、奇なる哉我れを饒益す。子若し世間に住して轉輪王たらば、

この妙法を以て我が心を開解し歡喜せしむること無からん、もし轉輪王たらば、生死の緒絶へざらん、

今や已に生死を絶ち、輪廻の大苦を滅して、能く衆生の爲に、廣く甘露の法を説く。

淨飯王は、法を愛するが爲に恭敬を増し、王の位、父の尊に居りつゝ、謙卑

し、稽首して禮せられました。國中の人民は、甚深の妙法を聞き、又王の合掌

禮拜せらるゝを見て、悉く奇特の想ひを生じ、居俗の累を厭ひて、皆悉く

出家の心を生じました。

時に淨飯王は、迦葉等千人の形體、至りて陋なるを見て、心に思惟すらく

『此等の比丘、心精なりと雖も、容貌陋なり、宗族の法を求むる者を勸めて沙門たらしめば、世尊を光輝せん』と。すなはち宗族を會して之を議るに、みな言ふ『大に善し』と。茲に於て優陀夷は、鼓を撃ち槌を鳴らして、王の教令を宣し、普く迦毘羅城内の家々の、一子を投じて、佛に隨つて出家することを許しました。

一一一 族

(1) 羅 睺 羅

淨飯王は、世尊を請せんが爲めに、諸食をととのへまして、宮中の人々に注意せられました「汝等、羅睺羅に向つて、悉達多は、これ汝が父なりといふ勿

れ、羅睺羅これを聞かば、恐らくは父に随つて出家せん」と。そこで侍従をして、羅睺羅を將て阿輸迦林を去らしめ、而して後、世尊を請じました。

世尊は、諸の比丘衆に圍繞せられて、王宮に入られました。時に羅睺羅はひそかに阿輸迦林を出で、王宮に還り、世尊及び諸の比丘衆を見んとて、樓閣に昇りました。時に羅睺羅の母、耶輸陀羅も亦この樓閣に在りて、世尊の剃髮染衣のすがたを觀、悲泣して居られました。そこで羅睺羅は

『何が故に悲泣したまふぞ』

とたづぬました。母の申されますやふ。

『沙門衆中に在る、身體金色なるものは、汝の父なり』

羅睺羅はこれを知りて申しました。

『生れて已來、かゝる尊き聖者を見ず』

母は更に告げました。

『汝、父のまゝに往け』

そこで羅睺羅は、樓閣を下りて、佛所に詣り佛の衣のうちに入りました。

世尊、王の供養を受け已りて去りたまふ時、羅睺羅も亦世尊を逐うて宮門の外に出で、世尊に依りそうて、尼拘陀林に至りました。時に世尊の仰せられますやう。

『汝、能く我れに随つて出家するや否や』

羅睺羅は、聲に應じて申し上げました。

『出家せん』

かくて世尊は、諸の比丘衆に告げられました。

『汝等比丘、我れ今羅睺羅を出家せしめ、舍利弗をして、和上たらしむべし。』

時に諸の比丘衆謂へらく、世尊昔日我等に告げたまふ、年二十に満たざる者は、具足戒を受くるを得ずと。羅睺羅は今僅かに六歳なり、いかで大比丘衆たるを得んと。世尊告げたまはく

『六歳にして出家せば沙彌たるべし。』

そこで諸の比丘衆。佛勅を蒙りて出家せしめ。舍利弗を以てその和上といたしました。

淨飯王は、佛及び比丘衆の去れる後、食を取らんとして、左右に命じ、羅睺羅を喚び來らしめました。左右處々に求めて、遂に尼拘陀園に至り、羅睺羅の

已に出家せしめられたるを見、還りて其のよしを王に復命いたしました。王聞きて憂愁に堪へず、城を出で、自ら尼拘陀園に至り、世尊に對して申されま

世尊の初めて生れし時、諸の解相波羅門等、若し家に在らば必ず轉輪王となるべしと授記せしに。前に已に出家したまへり。

世尊の出家したまへる後、我れ王位を難陀に附與せんと思惟せるに、彼をも亦出家せしめたまふ。彼既に出家せるを以て、阿難に王位を紹がしめんと思惟せるに、また出家せしめらる。その後阿那律をして、王位を紹がしめんと念へるに、また出家せしめらる。その後婆提に王位を就かせんとせるに、またく出家せしめらる。

今羅睺羅を留めて、王位を付せんと思はれたるに。また世尊に將て去らる。世尊。羅睺羅の出家せる後、豈わが王種を斷つなからんや。世尊、また子を戀ふるの情、皮肉筋骨に徹す。

世尊、今日より後、出家せんとするものあらば、先づ父母に諮らしめ。父母許して後、之を聽すの教制を作したまへ。

世尊、王意を諒としたまひ『大王の意の如くして、敢て違はじ』とまをされました。

(2) 淨飯王の崩御

後、淨飯大王は崩御になりました。諸の釋子、多くの香汁を以て王の身を洗浴し、棺に斂めて、七寶を以て莊嚴し、獅子座の上に置き、華を散じ、香を燒き、世尊と難陀とは前に在り、阿難と羅睺羅とは後に在りて、これを護りました。

難陀、長跪して白す『我れに父王の棺を擔ふを聽したまへ』と。
阿難、叉手して白す『我れに伯父王の棺を擔ふを聽したまへ』と。

羅睺羅合掌して白す『我れに祖王の棺を擔ふを聽したまへ』と。

時に世尊は、心に當來の世、人民兇暴にして、父母養育の恩に報いざるを念じ、この不幸のもの爲めに、是等當來の衆生の爲めに、禮法を設けられんとて、世尊躬ら父王の棺を擔はれました。

かくて世尊はまをされました、父母の哺乳長養の恩によりて、子の身體成るを得たり。されば、右の肩に父を負ひ、左の肩に母を負ひ、千年を経る間、背の上に便利せしめて、しかも心に怨むなからんも、この子、なほ父母の恩を報ずるに足らずと。

又まをされました。若し父母に信なくんば、信あるを得て、安穩の處を獲せしめまつり。戒なくんば、戒を與へて安穩の處を獲せしめまつり。智慧なくん

ば、智慧あるを得て、以て安穩の處を獲せしめまつるべし。これ眞の報恩なりと。

(3) 母及び夫人

世尊の姨母、淨飯王の夫人摩訶波闍波提（拔提夫人大愛道憍曇彌など、も申す）及び世尊在俗中の夫人耶輸陀羅は、淨飯王の崩御に遇ひまして、悲哀の情禁じ難く、曾て世尊の歸城せられし時、父王並に一族と共に、之を迎へて説法を聞いて居りましたのと、且つは拔提夫人の一子難陀、耶輸陀羅の一子羅睺羅を始め、一族中の名士、既に出家せられましたので、共に世尊の所に到り、出家して道を修めたきことを願はれました。

時に世尊は「女人は家に在りて髪を剃り、袈裟衣を着けて勤行精進すべし、

出家して道を修むるに及ばず」とて、その請ひをゆるされませんでした。そこで夫人は、請ひの容れられざるを悲しみ、弊衣跣足にて門外に立ち、涕泣して去りませんでした。阿難はこれを見て大に感じ、再三世尊に請ふところがありませんでした。世尊も亦多年養育の恩を思はれ、遂に出家を許されました。此に於て佛門に始めて比丘尼といふものが出来ましたので、世尊は爲に戒法を定められました。かくて精舎に近き尼院に住して、自ら諸の比丘尼を統理し、女人の出家を請ふ者に戒法を授けて、世尊の化導を扶けられました。

一一一 女性

(1) 玉耶女

釋尊が祇園精舎におはせし時でありました。舍衛城の須達長者(給孤獨長者)は息子の爲めに玉耶といふ或長者の女を娶りました。ところが、容貌の美しい女を誇つて、婦らしく姑や夫に事へず、毎日我儘な振舞ばかり致しますので、長者夫婦も大に持てあまして居りました。さればとて、打擲したり折檻したりするのは宜しくない、何とか良い方法はあるまいかと、いろいろ相談の結果、釋尊を御請待して、論じて頂くといふ事になり、此旨を御願ひ申し上げたのでありました。

釋尊は多くの御弟子と共に、長者の家に御入りになりました。長者夫婦は、息子と共に御出迎ひ申し上げましたが、我儘な玉耶女は、一室に籠つて顔を出しませんでした。けれども、釋尊の御入りといふので、家中の人々は、なにく

れとなく、いろいろと御給仕を申し上げ、和氣堂に満つといふありさまに、さすがの玉耶女も、衷心次第に慚づかしくなり、遂に釋尊の御前に伺ひ出すには居られないやうになりました。釋尊はやさしい微笑をうかべて、靜かに口を開かれました。

玉耶よ、女の美しいのは、容貌や、髪や、衣服に在るのでは無い、心を行ひのたゞしい所に在る。女にはいろいろな缺點がある。先づ幼い時には親に従ひ、出で、嫁すれば夫に従ひ、老いては子に従はねばならぬ。又兩親は男の生れることを喜ぶけれども、女の生れることはそれほどに喜ばない。大きくなれば嫁入り先きの事を心配し、妙齡に達すれば兩親の膝下を離れて他家に身をよせ妊娠出産の苦を受け、姑や夫の爲には常に心を痛め、束縛多くして、自由を得られないものである。

時に玉耶女は、佛の説法を聞いて、深く慚愧の心を起し、さらに婦の道につ

いて教へを願ひました。世尊はつゞいて説き諭されました。

玉耶よ、凡そ婦たるものは、夜は晩く寝れ、朝は早く起き、髪を理め、服を整へ面を洗ひ手を拭ひ、事あれば先づ之を夫に告げ、常に恭順にして、美味は先づ夫にすゝめ、たさひ訶られても能く之を忍び、口を慎み、心に恨まず、夫を守りて恒に及ばざるを恐れ、かりそめにも邪念を起してはならぬ。常に夫の長壽を願ひ、夫遠く出づれば家中を整理して、歸りを待つやうに心がければならぬ。常に夫の悪を念はずして、その善を念ひ、能く家名を揚げ、一族歡喜し、人に譽めらるゝやうに勤めればならぬ。

玉耶女は、たゞ默然として傾聽して居ります。世尊は更に言葉をついで仰せられました。

玉耶よ、世に七通りの婦がある。その第一を母婦といふ。夫を念ふこそ、母が子をいつくしむやうに、夫外出すれば、變つた出來事のないやうに念ひ、無事に歸れば、心を盡していたはり、

母の我子をいたはるやうにかしづくな、母婦といふのである。第二を妹婦といふ。誠を以て夫にかふるこそ、妹の兄に對するやうに、骨肉を分けた兄弟と、かはらない親しさを持つた、妹婦といふのである。第三を善知識婦といふ。夫につかへて敬愛至らざるなく、秘密の事あれば告げ、過まらがあれば咎め、善事があれば隨喜し、善知識のやうに夫を助け、夫を導くを善知識婦といふのである。第四を婦婦といふ。しゆうご、しゆうごめに對して愛と誠を盡し、夫に對しては謙讓に命に従ひ、朝は夙く起き、夜は晩く寝れ、言行を慎み、善事は他に譲り、悪事は自分に引き受け、情深く心正しく、貞節を重んじ、進みては義に背かず、退いては禮を失はず、ひたすら和を貴ぶな婦婦すなはち婦らしき婦といふのである。第五を婢婦といふ。常に夫の命に従ひ、荒々しい言葉や、我儘な行ひを慎み、禮儀を守りたさひ打擲せらるゝやうな事があつても、口をつぐんで逆はず、身の苦しみを忍び、嫉まず、怨まず、一心に婦の道を守つて、榮華を思はず、恰も婢が主人に仕へるやうな心持で夫にかしづくな婢婦といふのである。第六を怨家婦といふ。もごより夫婦の情なくして、猜み疑ひ、争ひたえず、夫を見ることを厭ひて、常に夫より離れやうとし、朝は

髪を亂して他ほご眠り、家事を放棄し、兒を育てず、婦の操を破つて、親里にまで恥辱を及ぼす、かくの如きな怨家婦といふのである。第七を奪命婦といふ。嗔恚の焰に胸を焦して、始終夫の隙をうかゞひ、或は毒を用ひ、或は人を使喚して、夫を殺さうとするやうな毒婦を、奪命婦といふのである。

玉耶よ、この中の善い婦は、人に愛敬せられ、世の譽を受け、九族悉くその榮を蒙り、天神地祇に護られて、もろくの禍殃を受けないが。悪い婦は、常に人に惡まれ、身安穩ならずして、常にもものに脅かされ、惡夢におそはれ、多くの災に遇ひ、命終れば惡趣に入り、苦を受くること限りなく、竟に出るの期は無いのである。

かくて世尊は仰せられました『玉耶よ、汝は善婦たらんを望むか、また惡婦たらんを好むか』と。時に玉耶女は、佛説を聞いて慚愧懺悔し、涙と共に白し上げました。

我れも愚にして、夫に順はざりしが、今世尊の化導によりて、心に開解いたしました。今より後、常に婢婦の如くにして、壽命盡くるまで、決して憍慢の心を起しません。

世尊は告げられました『善哉々々、人誰か過なからん。能く改めんか、善これより大なるなし』と、茲に於て玉耶女は世尊に御願ひして、優婆夷（在家の弟子）となりました。

(2) 摩登伽女

釋尊が舍衛國の祇園精舎におはせし時でありました。阿難尊者城内に入りて晨朝の行乞を終り、祇園に還る途すがら或池のほとりにて、水を汲める旃陀羅の女を見ました。旃陀羅とは牢番や屠殺を業とする、卑しき種族の稱であります。折しも阿難尊者は、渴をおぼえましたので、彼の女に少量の水を乞ひまし

た。時に彼の女は『水をおしむに非ざれども、我は旃陀羅の卑しき身、大徳の尊者に施さんこと畏れ多し』とて辭退しました。時に『阿難我は沙門なり、心平等にして豪貴と卑賤とに異なるなし、たい施されよ』と乞ひました。そこで彼の女は、淨水を阿難に捧げ、阿難は飲み訖りて、去りました。

初戀の心おかしや、妙齡の彼の女は、恍惚として阿難尊者のうしろ姿を見送り『あゝ、何といふ優しい御出家であらう、何と云ふ綺麗な御方であらう、あの美しい御顔、あの愛らしい眼、あの優しい御口、澄める御聲、親切なる御言葉、若しもあんな御方にかしづくことが出来たらば』と、思ひなやんでをりましたが、ふと氣付きましたのは、彼の女の母が呪術をよくすることでありました。よし『母の呪術であの方を』と、急いで我家に歸り、切なる意中を母に訴

へたのでありました。母は聞いて驚きました。

阿難尊者は、釋尊の御弟子である。若しもあの方を誘惑せば、必ず釋尊の熱心な信者なる波斯匿王が、激怒せられて我々一族をほろぼさるゝであらう。その上、世間に魔法にかゝらぬものか二つある、一つは死人で、一つは無欲の人である。釋尊の御弟子方は、皆修行を積んで欲心を離れて居らるゝから、呪術の力ではごうすることも出来ない。

いろ／＼事を分けて説き諭し、思ひ止まらせやうと致しましたけれど、戀に狂へる彼の女の心を鎮める力はありませんでした。『頼りに思ふ母さへも、此の願ひを聽いて下さらないならば、死ぬより外に途なし』と、思ひつめて居りますので今は母もせんすべ無く、遂に阿難誘惑の呪術を行ふことに致しました。魔法の力が現はれたか、戀の一念が通つてか、阿難尊者は何となく心迷ひ

て、ふら／＼と旃陀羅の家に向ふたのでありました。母は遙にこれを見て『娘よ、それ阿難尊者が見える、早く室を掃除し、美しき褥を敷き、花を散らし、香をたいて、お迎ひ申し上げよ』

これを聞いた娘は、嬉しき、恥かしきに、心も落ちつかず、そは／＼しながら室を淨め、座を飾り、用意を整へて待ちました。阿難は旃陀羅の家の前に來り、迎へらるゝまゝに座につきました。娘は今こそ戀のかなへりと喜んで、阿難尊者の手を執らうとしました。この時阿難は、恐ろしき罪に近づく自分に氣付き、慄れ戦き悶へ苦しみ、一心に世尊を念じました。

時に世尊は、天眼を以て之を見そなはし、阿難を慰みて、一偈を唱へられました。

戒の池、清涼にして、

能く衆生の煩熱を拂ふ。

智者この池に入らば、

無明の障盡きむ。

まことに戒は、

諸佛一乗の道なれば、

この道に入りし我なれば、

禍を彼は逃む。

阿難は、世尊の威神力に守られて、危うくも禍難を逃れ、事無く祇園精舎に還ることが出来ました。こと茲にいたりては、呪術は何の力なく、娘は失望してたゞ泣くばかりでありました。

翌くる日、彼の女は朝早く起き、新衣を着け、花鬘を戴き、美しい瓔珞をまとうて、たいひとり、祇園精舎の方へと出てまわりました。折しも阿難尊者の托鉢に出らるゝ姿を見まして、歡びに堪へず、その後を追うて、止まれば止まり、歩めば歩み、どこくまでも阿難尊者に隨逐して離れません、阿難これを見て恐ろしくなり、急ぎ精舎に還り、世尊にうつたへました。女も後を逐うてまわりました。時に世尊、女に告げられました。

『汝阿難の妻になりたいか』

女は點頭きました。世尊はかさねて告げられました。

『すべて婚姻の法は、親の許諾を得ねばならぬ』

そこで女は、母を伴ひ來り、共に許諾の旨を白しあげました。世尊は更に告げ

られました。

『阿難の妻となるには、その綺麗な俗服をぬぎすて、出家さなければならぬ』

かくて忽ちにふさくとした黒髪は剃りおとされ、法衣姿の若き尼となりました。時に世尊は、いともおごそかに仰せられました。

『汝は阿難の何を愛するか』

『世尊よ、阿難尊者の眼を愛します、鼻を愛します、口を愛します、耳を愛します、聲を愛します、行歩を愛します』

『汝の愛する阿難の眼の中には、汚ない涙があるではないか、鼻の中には涕があり、口の中には唾があり、耳には垢があり、身體中に不淨が充ち満ちて居るではないか、たゞ阿難の外貌のみを見て、染着してはならぬ、眞實の道を尋ねて、道に生きよ』

かくて懇に五欲の過を示し、四諦の眞理を説き聞かせられました。彼の女

は佛の説法を聞き、心眼次第に開けてまゐりました。時に世尊は告げられました。

『阿難には良い妻が出来た、起つて阿難の所へ往げ』

彼の女は世尊の仰せを聞き、慚愧の汗を流しつゝ、白し上げました。

『世尊よ、我れさきに愚癡にして、欲の酒に酔ひ、聖者を擾亂して、不善の業を造りました。唯願はくば世尊、我れに懺悔をゆるさせ給へ』

『我れ已に汝の懺悔を受たり、汝今當に知るべし、佛世は遇ひ難く、人身は得難し、生死を解脱するこそは更に甚だ難しき爲す。かくの如きの難事を、汝已に得たり。この故に、汝應に精進すべし、慎んで放逸なる勿れ』

かくて年若き娘は、本性比丘尼として、新生涯にはいつたのでありました。

(3) 末利夫人

舍衛城主波斯匿王の妃、末利夫人は、釋尊が初めて祇園精舎に御入りになつた時、歸依した人であります。それよりこのかた一生の間、王の精神的指導者として、内助に力を盡されました。容貌は至つて醜い方でありましたけれども、非常な才女である上に、佛教信仰の厚い人でありましたから、深く王の敬愛を受けて居られました。

或時、波利といふ商人が王宮へまゐりまして、波斯匿王に珍らしい香璽を献上しました。そこで、王は後宮三千の夫人を集めまして、才色も優れたるものに、この香璽を與ふことゝいたしました。やがて多くの夫人は、それゝ装ひを凝らして、王の前に集まりました。

時に末利夫人は、恰も其の日(十五日)が齋戒日に當つて居りますので、素服

を着けたまふ、遠慮して内宮に引き籠つて居られました。ところが王は甚だ不機嫌で、三たび使ひを以て、夫人に出る様にうながされました。そこで夫人は已むことを得ず、素服のまゝで王の前に出られました。綺羅びやかな多くの夫人達の中に、末利夫人の素服姿は、一きは目だつて清く輝いて観えるのでありました。

三千の夫人は顔色なく、王は驚きの眼をみはつて『末利よ、おんみはごうして其のやうに氣高く美しいのである』かと申されました。時に末利夫人は

『私は罪の深い、障の多い、淺間しい女で御座います、但御佛の教を信じて、齋戒をたもち、漸くしので居るので御座います』

と申し上げられました。王は、やさしい其の心に感じて、香嚢を末利夫人に與

へられました。ところが夫人は

『私は齋戒中で、かやうなものを着けることは出来ませぬ。それではこれから御一緒に世尊の所へ詣りまして、これを世尊に献上し御教を承ることに致しませう』

とて、共に釋尊の所へ詣り、御説法を願ひました。時に釋尊は、波斯匿王の爲に、戒香の香嚢にもまして尊き所以を教へられました。

或時王は、末利夫人に向ひ、釋尊の御説法の中に、『愛の生ずる時、苦しみ起る』とありしを、ごうも疑問でならぬと申されました。時に末利夫人は

『大王さま、あなたは瑠璃王子を御寵愛あそばさすでせう』

『大に愛する』

『それでは、若し王子の身邊に不慮の災難が起りましたならば、いかゞなされます』

『大に心配する』

『大王さま、おわかりになりましたか、愛の有るところには、苦が有るので御座います』
『大王さまはまた伊羅王子を御寵愛あそばさずでせう。薩羅夫人も、そして私も御寵愛下さるでせう』

『大に愛する』

『それでは、若し伊羅王子や、私共に不幸が起りましたならば、ごうなさいませう』

『大に心配する』

『大王さま、おわかりでありませう、愛の生ずる時に苦が起るので御座います』

末利夫人は、かくの如く、縁に觸れ事に遇ふ毎に、王に對して佛の教をすゝめられましたから、大王も自然と佛教を信するやうになられました。

(4) 勝鬘夫人

勝鬘夫人は波斯匿王の妃、末利夫人の愛女であります。妙齡の頃、阿踰陀國

の友稱王の許に嫁がれました。

或日、故國の父母から便りを受けました。それは、こまごと釋尊のことを認めて、一刻も早く御訪ねするやうにとの便りでありました。夫人は、釋尊が當國へ御出でになつたことを聞き、一度お参りをしやうと思ひながら、事に障へられて果さずに居た際でありましたから、一しほ父母の親切を身に泌て歡んだことでありました。

夫人は、其の後間もなく釋尊に歸依して、麗しき佛教篤信の人となられました。さうして、友稱王が國父のまゝに又法父として、七歳以上の男子を教化せられたやうに、夫人も國母のまゝ亦法母として、七歳以上の女子を教化せられました。それゆへに、阿踰陀國には、佛教が盛んに興りました。勝鬘經の中に

夫人の十大受、三大願が説かれてあります。

(一) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、受くるところの戒を犯すことはありません。

(二) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、師長に向つて慢心を起すことはありません。

(三) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、一切の衆生に對して、悲りの心を起すことはありません。

(四) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、他人の容色や所持品に對して、嫉みの心を起すことはありません。

(五) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、精神上も、物質上にも、慳む心を起すことはありません。

(六) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、自分のために財物を蓄へず、すべて貧苦の

者を救ふために用ひます。

(七) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、自分のために四攝事(布施、愛語、利行、同事)を修めず、一切衆生の爲に、愛染なき心、厭足なき心、罣礙なき心を以て、衆生を攝めやうと思ひます。

(八) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、若し孤獨の者、獄にある者、疾病、厄難、種々の困苦にある者を見れば、直に適當な方法を考へ、苦を救ひ、安らかさを與へやうと思ひます。

(九) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、鳥獸を捕ふる者や、種々の悪い行ひや、戒を犯す者を見れば、逃すことなく、力の及ぶかぎり、懲すべきは懲し、諭すべきは諭さうと思ひます。

(一〇) 世尊よ、わたくしは、今日から佛の證りを得るまで、正法を攝受して、忘るゝことはありません。

1. わたくしは、この願ひによりて、一切の衆生を安んじ、この善本によりて、如何なる生を受けても、正法智を得ることに努めませう。
2. わたくしは、この智慧に徹した上は、飽こなく、一切の衆生に説き示します。
3. わたくしは、この正法を攝受し、護持するためには、身も命も財も惜みません。

(5) 修摩提女

修摩提女は、須達長者の娘であります。妙齡に及びまして、満富城の満財長者から、子息の嫁に迎へたいといふ申込を受けました。ところが、満財長者は波羅門教徒でありますから、婚約を躊躇せられました。信仰を異にする爲に、問題の起ることは、世間にありがちの事であります。そこで須達長者は、釋尊の許に詣りて、教を請はれました。時に世尊は『若し修摩提女が適くことになれば、必ず多くの人々を救ふであらう』と仰せられましたので、日を定めて婚禮

の式を擧ぐることに約束が調ひました。

さていよいよ婚禮の日がまわりました。目出たく式も終りましたが、この國では、當時他國の者と婚姻することを禁じ、若し禁を犯した者は、六千の婆羅門を招いて供養せねばならぬ事になつて居りました。満財長者は、豫て承知のことです。充分にその用意をして、多くの波羅門を招待し、供養をいたしました。時に修摩提にも、婆羅門衆に挨拶するやうにと告げましたが、彼女は釋尊の教によりて、深く佛教を信じて居りましたから、異教徒を禮拜することを絶對に拒みました。果して信仰の相異より、早くも家庭に風波が起きたのであります。

或日、満財長者の平素歸依する修跋といふ婆羅門が、突然訪ねてまわりました。

た。そうして須達長者の娘、修摩提女を迎へたる事を聞き「須達長者は有名な
佛教信者であるから、娘も定めし佛教篤信の人であらう。よき嫁を迎へた
り」とて、大層讚歎いたしました。異教徒を譽むるので、満財長者は奇異の感
に打たれましたが、修跋婆羅門から、釋尊の御徳高きこと、大衆も皆優れた人
ばかりであることを聞き、一度御請待申上げたいといふことになりました。
かくて満財長者は、修摩提女に向ひ「釋尊の御徳を聞き、一度御請待申上
げたいと思ふけれど、供養の作法を心得ないから、何分よきに取りはからつて
呉れよ」と申されました。修摩提女はこれを聞いて、驚喜し、うれし泣きに泣
いたことでありました。

やがて其の日がまゐりました。釋尊は、大衆と共に、迎へられて満財長者の

家に御つきになりました。満富城の長者、居士、外道、市民、雲のやうに彼の
家を集まりました。釋尊は、長者の手厚き供養を受けて後、懇に御說法あそ
ばされました。長者の一族を初め多くの人々は、釋尊の御說法を聞き、皆佛
教信徒となりました。

(6) 快見女

王舎城に厲氏といふ長者がありました。其の子に佛大、僧大といふ兄弟を持
ちて居りました。將に此の世を終らんとする時、長男の佛大を枕邊に呼んで、
「父亡き後は、代りて弟の僧大を愛育し、兄弟睦じく暮すやうに。それに就
いては何よりも世尊の教を受けて、戒律を守らなければ一身を危ふくする、必
ず戒法を守るやうに」と遺言して間もなく命終りました。

さて弟の僧大は、成人の後、道を求むる志堅く、しばらく兄に向つて出家したいと願つたのでありました。兄は其の志を阻止せん爲めに、某長者の娘快見といふを、弟の妻として迎へました。けれども、僧大の志は、依然として變るところなく、兄に訴へて止みませんでした。そこで佛大も力及ばず、遂に弟の意に任することゝいたしました。

僧大は兄のゆるしを得て、年來の願ひかなひし喜びに堪へず、其の日、直に出家して山に入り、就て學ぶべき師匠を諸處に訪ねました。漸くにして一人の若き修行者に遇ひ、跪いて懇に指導を乞ひました。修行者は先づ自ら出家の動機を、次のやうに語りました。

思へば色欲ほご恐ろしいものは無い。恰も炬火を持ち風に逆うて行く時、火焰の燃えあがらな

い間に、それを地上に置かなければ、忽ち自分の手を焼くやうなものである。又大きな鷹に追はるゝ鳥は、其の衝へたる肉を棄てなければ、自ら彼の餌食となるやうなものである。又兒童が蜜を塗つた刀を舐めて舌を截るやうに。飢た狗が枯骨を咬んで口中を傷めるやうに。色を好む人は、賢者を遠ざけて愚人に親しみ、自ら身を亡ぼして未來地獄に墮つるのである。自分はこの問題に目ざめて出家したのであるが、さて出家して戒法を守つて見ると、常にすがくしい心を持ち續けて、何等思ひ煩ふところも無い。

僧大は、若き修行者の熱心なる告白に感動されて、暫らく止まり其の教へを受けましたが、後更に山深く分け入りて、獨り修行をつけたのでありました。

こゝに哀れなるは、家に残りし僧大の妻快見でありました。妻といふは、ほんの名ばかりでありますけれど、一旦夫と定めたからには、今さら親許へ還る

心も無く、獨り空閨を守りて、旦け暮れ、たゞ夫の安否をのみ氣遣うて居りました。かゝる間に、佛大の心は、いつしか美しい快見の上に注がれるやうになりました。

煌々たる鬱金の花

野に開く

手折らずば

いまに朽ちむ

うい／＼しき君の容よ

はなやかな君の姿よ

君を見て

我魂迷ふ。

もとより快見の、うけがふべくもありません。

みほさけの

みのりはふかし

そを慕ふ夫の心ぞ

さばに戀ひしき。

たさひわれ

身はずたくにならうさまよ

わがこゝろ

二君につかへじ。

けれど佛大は、思止まることが出来ません。

君をおもふ心は久し

いかにして君をえんかこ

我は久しくいたみぬ。

いま君を見て

我心よろこぶ

我がまこと涙み給へや。

快見は、嚴かにたしなめました。

みほさげは

禮儀の道を説き給ふ

叔妻は子にして

婿伯は父ならずや

いかでわれ

兄君の御言聽かんや。

佛大は、今や心狂はしくなりました。

美しの君よ

君の容色は輝く

天が下の美し女も

君には及ばじ

我心狂ひぬ

いでさもに情に酔はむ。

けれども、快見の心を動かすことは出来ませんでした。

兄君よ許させ給へ

この身は骨と皮とに

穢き血と肉とを盛れるのみ

うつろひやすき

我身に迷はで

變らぬ道を念じ給へや。

戀に破れた佛大は。遂に恐ろしいことを企てました。彼は窃に無頼漢をかり集め、財寶を興へ、旨を含めて弟を殺さしめることゝしたのであります。

ある晩、件の無頼漢は、僧大の所へ押し寄せました。驚いたのは僧大であります。『皆さんは、夜ふけてこの山奥へ、何の御用で見へましたか、こゝには水と火と麩蜜とより差し上げるものはありません。私は王舎城の長者、佛大といふ者の弟で、家には巨萬の財があります、今手紙を認めますから、どうぞ

兄の所へ行つて下さい。』時に彼等は『その兄が、汝の首を求めて居るのだ』と申しました。僧大これを知りて深く驚き、それと推察することが出来ました。

皆さん、よく聞かしてくれました。私は先頃、師匠から色欲の恐ろしいことを聞きましたが、今斯なるのも、全くその爲であります。しかし、どうぞ一年だけ待つて下さい、その間に佛の道を證らうと思ひますから。

けれども惡漢等は耳をもかさず、早や、刀をひらめかして、いきりたちました。僧大は覺悟を定め、賊に命じて樹の皮を取らしめ、枝を筆として血汐に浸し、兄の爲めに一片の遺書を認めました。

大兄よ。慈親の遺訓に背き、色欲に迷うて、遂に骨肉を傷ひ給ふ。不孝といふべし、不仁といふべし。我は今兄の刃に罹りて、永へに解脱の境に遊ばむ。たゞ願はくば、自今以後、正しき道を崇め給へ。

認め終りて、心しづかに兇刃に斃れたのでありました。

悪漢等は、遺骸を佛大の所へ運び歸りました。佛大は多数の金銀を興へて、厚く彼等をもてなし還して後、首を遺骸につけ、衣を被せ、杖と鉢と、きものとを傍に置き。巧に病人のやうに取つくろひ、快見の室にまゐりまして『今僧大が歸つて来たから、奥の間へおいで』と、白々しく誘ふのでありました。

彼女は夢かどばかり、直に奥の間へかけました。見れば夫は目を閉ぢて靜坐して居りますから、道を念じて居らるゝことゝ思ひ、わざとひかえて挨拶を止め、自分の室に歸つて食事の用意をし、心もそらに、坐禪から覺めらるゝ時を待つて居りました。けれども、日中が過ぎてても、坐禪から起ち給ふ様子が見えませんが、待ちくたびれて、再び夫の傍へ、食事の知らせに行き、一度、二

度、三度、丁寧に挨拶をしましたけれども、もとより死人のことであるから、何のいらへもあらう筈がありません。彼女は若しやと心戦きつゝ、近よりて夫の衣を牽きますと、斯はそも如何に、頭は忽ち地に落ち、遺骸は分散して、目もあてられぬ慘状であります。

嗚呼戀ひしき夫は、自分ゆへに、いたましくも殺されたまひしかさ、彼女は床の上に仆れて、嘔吐し、血を吐いて、そのまゝ、殉死したのでありました。

佛大は、物音に驚いて室へ来て見ますと、弟の遺骸は四方に分散狼藉し、美しい快見は、血汐にまみれて、遺骸を抱いて仆れて居るのであります。さすがに佛大も、この惨しい光景を見ては、一旦の情慾に心狂ひて、清く美しい夫婦を殺害したる、自分の罪の恐ろしさに、戦慄せざるを得ませんでした。

彼は遺書を読みつゝ、苦しみ、悶へ、恨み、泣き、遺書を手に持つたまゝ、悶死したのでありました。

(7) 蓮華色女

得又戸羅城の長者の娘に、蓮華色といふ女がありました。妙齡になつて同じ城内から婿を迎へ、間もなく一人の女兒を産みました。ところが、父の亡くなつた後、母は獨り寝の淋しさに堪へかねて、何時となく彼女の夫と通じました。之を知つた彼女は、女兒を夫の前に擲げつけて、血みごろに傷つくを願はず、狂人のやうに家を飛び出してしまひました。

彼女は、波羅捺城に趣き、塵にまみれて、跣足のまゝ城門にたゞずんで居りました。その時、そこを一人の商人が通りかゝりました。彼は近頃妻にわかれ

て、淋しい思ひをしてゐたので、何となく、彼女の美貌に心をひかれました。

『あなたは何處の御婦人ですか』

『妾は得又戸羅の者で御座います』

『どうして、こんな處に居るのでですか』

『妾は、よる邊のない、哀な女で御座います』

『それはお氣の毒である、さもなくも私の處へおいでなさい』

彼女は、勧めらるゝまゝに、商人の所へ行つて、終に其の妻となりました。

それから十年あまりも後のことである。或時、彼女の夫は商用のために得又

戸羅に行きました。彼地に滞在中、また一人の若い女と懇意になりました。

其の女が蓮華色の子であることは、商人の夢にも知らぬところでありました。

さて商人は、其の美人を連れて、喜んで歸りましたが、流石に妻を憚つて、

女をば近所に隠し置き、購ふた貨物の半分を與へて、自分は何喰はぬ顔をして家に歸りました。彼女は、久しぶりに夫を迎へて、非常に歡びましたが、買ふた品物の餘り少いの不審を抱き、其のわけを尋ねて見ました。

ところが、夫は賊の爲めに奪はれたと、出鱈目のことを云ひ、そしてこれから其の賊を探しに行くとして、急いで出かけました。

暫らくして、夫の留守中に、友人が訪ねましたので、其の話をいたしますと、その人は、變に笑うて、それは美しい賊を尋ねに行つたのであらうと云ひ、そして、彼女の夫が、旅から美人を連れて歸つて、隠してあることを話して聞かせました。夫は夜晩く、ふらくと歸つて來ました。彼女は烈しく亢奮しましたけれど、じつところへて

『あなたは、妾を欺しましたね』

『何を』

『美しい方が出來たのでせう』

『誰れに聞いた』

『あなたの御友達から聞きました』

妾は、決して彼れ是れとは申しませんから、どうぞ宅へ入れて下さい。若しも其の方が、妾と同じ年配ならば、姉妹のやうに思ひませう。若しお若いやうでしたら娘のやうに思ひませう。といふ妻の申し出でにまかせて、女を家に入れました。妻は女が自分の故郷の者だといふことを聞き、眞實の娘のやうに、いつくしみました。或日妻は、女の髪を梳いてやりながら、ふと頭の瘡痕を見て

『おまへ、この傷痕はどうしたの』

『妾は、よく覺へて居りませんけれど、人の話によるさ、何でも妾の幼いまきに、兩親夫婦喧嘩をして、妾を擲げつけた其の時の痕だそうです。』

『おまへのお母さんは、何さいふの』

『蓮華色と申します、幼い時に家を出て……』

というて、女は悲しさにさしうつむくのでありました。之を聞いて蓮華色は氣絶せんばかりに驚きました。蟲の知らせでもいふものか、此家に來た時から、何となく可愛ゆく感せられたが、その可愛い自分の子が、母の身から夫の愛を奪ふた、戀の敵であらうとは………。彼女はごうしてよいか、全くわからなくなつてしまひました。喪心したやうになつた彼女は、またふらふらと家を飛び出し、諸處を流浪して廣嚴城にまゐりました。それからといふものは、朝となく、夕となく、身を賣つて渡世し、あはれ淪落のどん底に沈んで

しまひました。

その頃、廣嚴城に二人の門衛が居りました、かねて、若し都合よく二人の間に男と女の兒が産れたならば、互に娶はせやうといふ、堅い約束をいたしました。時に蓮華色は、間もなく一人の男の子を分娩しました。しかし、商買の妨げになりますので、窃に其の子を城の東門に棄てました。兒は幸ひに東門の門衛に拾はれました。その後、彼女はまた一人の女の兒を産みましたが、今度は城の西門に棄てました。その兒も幸ひに西門の門衛に拾はれました。かくて二人の兒は追々に成人いたしました。

さて、東門の男の子は、成人の後、花柳の巷に出入りすることを覺へまして何時となく蓮華色に馴染を重ね、遂に彼女を身受けして妻といたしました。當

時、彼女はもう四十の坂を超えてゐたのでありませうが、天性の仇姿は、なほ浮れ男を迷はすに充分であつたと見へます。そして又かねての約束から、西門の娘をも妻といたしました。蓮華色はど、不思議な運命に翻弄せられた者はありませぬ。

或日のこと、釋尊のお弟子の目連尊者は、その男の家を訪れて、新來の妻に『汝は知らないであらうが、汝の夫の第一の妻は、實に汝の母であり、汝の夫は實は汝の兄である。恐ろしい罪を犯さないやうに、注意せねばならぬ』と告げて歸られました。その後蓮華色は、また一人の子を産みました。あるとき、新來の妻は、其の兄を抱いて門前に遊んで居りますと、そこへ一人の相師が通りかゝつて、不審そうに二人の顔を見比べて居りましたが

『もし御婦人、この兄はあなたの産みの子か。それとも、どういふ縁のお子ですか』
『よくぞ尋ねて下さいました。』

この兄は妾の弟でございます。

また兄の兄でございます。

まに妾の兄で、

また夫の弟でございます。

この兄の父は妾の父で、

そして、妾の夫でございます。

妙な縁だと思はれませうが、

どうぞ御察下さいませ。

相師は彼れの話聞いて、笑ひながら立ち去りました。その時、蓮華色は門の

内で此の話を聞き、驚いて女を呼び、そのわけを聞きますと、女は目蓮尊者から教へられたまゝに、詳しく身の上ばなしをするのでありました。

嗚呼、さきに母と共に一人の男を諍ひ、後には子と共に一人の夫にかしづき、今はまた子を夫とし、娘と共に同じ夫に事へねばならぬ。もう世の中は、何が何やらさつぱり解らなくなつた。彼女の心は壊れてしまつたのでありました。

蓮華色は、またも家を飛び出して、王舎城にまゐりました。城内の浮れ男はいつの間にもやら彼女の噂を聞き、争うて彼女を弄びました。彼女は、こゝでもかなりに長い間、荒んだ生活をしたのでありますが、しかし、彼女の道に入る機縁は漸くに熟してまゐりました。淪落に馴れきつた彼女は、ごうやら心の

淋しさを、歡樂にのみまかせては居られぬやうな氣持になつてまゐりました。

或日蓮華色は浮れ男に連れられて、花園に遊んで居りますと、向ふから目蓮尊者がおいでになりました。その時一人の若者は、珍らしい出家の姿を見て、彼女にからかひました。

『向ふから美しい坊さんが来るよ。あの坊さんは戒行の正しい人だから、いかな君でも、あの坊さんばかりは、だめだらう』

『何のことがありますか』

『さあ、ごうかれ』と

いうて居る内に、蓮華色は靜かに尊者の所へ歩みより、さま／＼な、なまめかしい容姿をして、尊者の心をひいて見ました。尊者は、彼女の果敢ない心を哀れに思はれ、嚴かに説いて聞かされました。

「女よ、汝は厭ふべき身を持つて居る。醜い骨は骨を連なり、筋肉は蛇のやうにうねつて、赤血、黒血が其の間を流れて居る、また九つの孔からは、涙、涕、唾、糞、尿の他いろ／＼な穢い液が流れて居る。若し眞實に自分の身の不淨を觀するならば、夏の廁のやうに厭ふたであらうに、何も知らずに、自分の姿に迷うて、ちやうど、老いたる象が、泥中に溺るゝやうに、慘ましい日をおくつて居るのである」

見る／＼うちに、彼女の双眼からは、はら／＼と悔恨の涙が流れました。

「あゝ、妾は長い間、夢を見て居りました。穢れた身を飾つて人を欺き、自分をもたまして居りました。若し眞實に自分の身に氣づいたならば、夏の廁のやうに、此の身を厭ふたに相違ありません。どうぞ、この身も心も穢れはてた妾のために、御のりを説いて下さい。妾は眞實の道に入りたく御座います。」

かくして蓮華色女は、目連尊者の説法によつて道に入り、尊者に導かれて釋

尊の所へ詣り、最初の比丘尼なる釋尊の姨母、摩訶波闍波提比丘尼の弟子となりました。

(8) 韋提希夫人

摩揭陀國頻婆娑羅王の妃、韋提希夫人は、中年を過ぐるまで世嗣の太子が生まれないので、心淋しく思うて居られました。或時相師が占つて申しますには、今毘富羅山中に一人の仙人が居る、遠からぬうちに壽命盡き、死後は太子に生れかはつて來るから、二三年待てば、かならず太子が得らるゝと、かう申しました。かくと聞きたる頻婆娑羅王は、一日も早く世嗣の太子を得たいといふ考へから、家臣を山中に遣はして、仙人を殺さして仕舞ひました。

頻婆娑羅王は、前に申したやうに、釋尊出家の時から、因縁の結ばれた人

で、國王の最初の歸依者であり、竹林精舎を建て、釋尊に献じたほどの、佛教信者でありましたが、子供が欲しいといふ一念の迷ひから、人を遣はして仙人を殺さしむるやうな、取り返しのつかぬ、無理な事をしてしまつたのであります。ところが因縁といふものは不思議なもので、相師の云つたやうに、仙人を殺してから間もなく、韋提希夫人は妊娠しました。然るに仙人が殺される時大變頻婆娑羅王を恨んで、此の恨みは必ず晴らさずには置かないとて、呪ひ死んだといふことを聞きましたから、王も甚だ氣がゝりでなりません。若し太子が生れたならば、或は復讐せらるゝかも知れぬ。世嗣は欲しいが、怨敵を我が子に持つのも恐ろしど。折角生れて來ただけれど、無い昔と思つて殺して仕舞つた方がよからうといふ考へから、お産の時に、高臺から産み落したのであり

ます。ところが、産兒は僅かに足の指を折つたのみで、別にたいした怪我もなかつたのであります。取り上げて見れば我が子で、可愛さに變りはありません。そのまゝ養育して、阿闍世太子と名づけられました。

阿闍世太子は、何も知らずに、成長せられました。このまゝで進んで行きましてならば、何等の變つた事も無しに濟んだのであります。釋尊の從弟でなか／＼賢い人でありましたが、ごうも心根の良くない提婆達多といふお弟子がありました。釋尊にとつて代らうといふ不逞の野心を起しまして、阿闍世太子を誘惑にかゝつたのであります。

太子よ、あなたは何も御存じないが、あなたの父たる頻婆娑羅王は、實はあなたの生前からの敵である。あなたの前生は、毘富羅山に居た仙人で、あなたの父は、其の仙人を殺したのである。そのみ

ならずあなたの生れる時には高臺から産み落として、あなたを殺さうとしたのである。其の證據には、あなたの足の指を御覽なさい、一本折れて居るのは、その時負傷せられたのである。かゝる怨敵であるから、あなたは父を亡ぼして、早く王位に登りなさい。私は亦釋尊を亡ぼして法王となりませう。新王と新佛相提携して、思ふまゝに事を行はうではありませんか。

斯ういふ風に、たび／＼誘惑したのであります。これまでも何にも知らずに過ぎて来た阿闍世太子も、事實を聞いて見れば父は全く自分の敵であるといふことが、明かになつたので、遂に逆心を起し、父の王を捕へて七重の牢獄に幽閉し、何人をも近づかしめず、飯食を給せず、餓死せしめやうとしたのであります。たゞ韋提希夫人だけは、出入を許されましたが、食事を運ぶことは、堅く禁せられたのであります。

斯うなると、韋提希夫人は、實に身も世もあられす悲しみ痛まれました。いろ／＼苦心の末、身體をよく洗つて、麥の粉を身に塗り、瓔珞の中に蒲桃の漿を盛り、夫王に呈して漸く飢餓を凌がして居られました。又かねてより法の友として親しくして居られた目連尊者は、日々七重の室内に來られて、王の爲めに説法せられました。王は飯食と教法とを得る爲めに、心身ともに少しも衰ふることなく、三七日の間を安穩に過ごされました。

かくと聞きたる太子は憤怒措くところを知らず、直に母后韋提希に向つて劍を抜いたのであります。時に耆婆、月光等の重臣がかけつけて諫めました。

昔しから、國を奪はん爲めに、父王を害せし者は數多いことであるが、母を害したさいふやうな、無理非道は聞いたことがない。若し今此の非道を敢てせらるゝならば、到底この王宮に留まることは許

されたい。

劔を按して極諫しましたので、阿闍世太子も母を害することだけは思ひ止まりましたが、憤怒のこゝろは止みません、遂に韋提希夫人をも亦深宮に幽閉して、一步も出づることを許さない事に致しました。

頻婆娑羅王には、もはや食事をさゝげる者がいないから、たゞ餓死を待たるゝばかりであらう。夫人も亦深宮に幽閉せられたのであるから、明日の運命もはかられない。これがかりそめにも一國の大王及び王夫人としての身の成り行きであらうか。それも戰國の習ひ、敵國と戦つて敗北し、捕はれの身となつたとしてもいふ事か、現在一人の我子から、かくも慘酷に扱はれて居るのであるから、韋提希夫人の懊惱は、いふに言はれぬごん底に沈んだのでありました。

こと茲にいたりましては、既に我が子が怨敵でありますから今まで使つて居た百官臣僚も、一人として頼みになる者はありません。財産も、地位も、更に我が身、我が命、それさへ今は頼みにならない。真に行き詰つた韋提希夫人の、とるべき道は唯一つ。それは佛陀を呼び奉るより外に無かつたのであります。そこで韋提希夫人は、釋尊に向つて念願いたしました。

これまで、たびく阿難尊者をお遣はし下さいまして、御説法を聞かして頂きましたが、今私は押しせまつた悲しみに沈んで居ります。世尊に御願ひするは畏れ多ふ御座りますで、ごうか阿難、目連兩尊者をお遣はし下さいますやう、お願ひ申し上げます。

時に釋尊は、韋提希夫人の道を求むる心が痛切であり、真劔であることを知らしめして、阿難、目連の兩弟子を従へ、親しく宮中の幽室に、韋提希夫人を訪

れられました。思ひがけなき釋尊の御入來に、韋提希夫人は感極まつ五體を地に投げ、號泣して世尊に哀願いたしました。

此の世界は、實に濁惡の世であります、全く愛想が付きませんでした。何處にか憂ひ、悲しみ、苦しみ、惱みの無い、濁惡を離れた、清淨安樂の世界は無いものでせうか。惡人を見ず、惡聲を聞かない世界がありますならば、私は其處に往生させて頂きたいのであります。

かくて釋尊は、韋提希夫人の爲めに、阿彌陀如來の安樂淨土に往生するの道を説き示されました、それが觀無量壽經であります。

一三 順 逆

(1) 阿闍世王

王位を奪ひ、父王を幽閉して、遂に死にいたらしめし阿闍世王は、その後、

拘薩羅國の波斯匿と、兵を交ふること數年に亙りましたが、戦ひ敗れ生擒せられました。時に波闍匿王は、これを將ゐて祇園精舍に至り、釋尊の御前にて、阿闍世王の野心を捨てしめ、放ち還して、兩國互に親交を結びました。後に波斯匿王が、其の子、瑠璃太子の爲に追はれたる時は、阿闍世王をたよつて、摩揭陀國に向ひましたけれども、途中發病して亡くなられたといふことであります。

或時、阿闍世王は、愛兒の手に、瘡を病めるを悲しみ、自ら之を吸うて、其の毒を除かんとせられました。傍らにて此のありさまを視て居られた韋提希夫人は、坐ろに往時を追懷して、今昔の感に堪えず、阿闍世王に向ひ『父の王も亦汝をかくの如くせり』と告げられました。子を持つて知る親の恩と申しませ

うか、阿闍世王は、遽に舊惡を愧づる心起り、且つ提婆の慘死せしことをも聞かれたので、いよく後悔と恐怖の心に堪えず、煩悶懊惱のあまり、全身に瘡を病みて、日夜病床に苦しむ身となりました。母の韋提希夫人は、不眠不休に懇切の看護を続けられました。阿闍世王は、苦痛を當然として母の看護を却け、慚愧懺悔に、身も世もあられす悩むのでありました。かくて耆婆の勧めにまかせ、釋尊の説法を蒙りて、翻然歸佛の人となられたことが、涅槃經の梵行品に出て居ります。

また阿舍經の方によりますと、時恰も七月十五日、安居自恣の夜、月明かなるに際して、衆に向ひ、如何にして斯の胸中悶々の情を慰すべきかを謀りました。衆中或は五慾の楽しみに耽るべきを勸むるもあれば、戦闘によりて苦痛を

忘るべきを説くもあり、或は六師外道の教によるべしといふ者もありました。が、いづれも王の意に契ひません。最後に耆婆の勧めによりて佛所に詣り、深く懺悔して、釋尊の説法を聞き、心懷忽ち開けて佛法に歸し、優婆塞となりて終身五戒を嚴守すべきを誓ひ、翌日釋尊及び大衆を請じて城に歸られたと出て居ります。

其の後阿闍世王は、釋尊及び大衆を宮中に請待して、九十日の安居を開き、又竹林精舎に詣るまでの間に萬燈を點じ、その他いろく三寶供養の事に、誠意を盡されました。釋尊入滅して茶毘を終るや、阿闍世王は、直に往きて遺骨の八分の一を受け、塔を建て、供養し、尋いで大迦葉を首座とし、五百の大衆を會し、大檀越として厚き外護を加へ、釋尊の説法を結集せられました。これ

が、佛典の第一結集であります。かくて阿闍世王は、釋尊滅後二十四年に世を終られました。

(2) 提婆達多

略して提婆又は調達と申します。斛飯王の子、難陀の弟で、釋尊の從弟に當ります。釋尊成道の後、始めて故國に父母を省せられ、七日にして去らるゝや、同族と共に追跡して、出家した一人であります。けれども、生來名聞利養の念強く、在俗の間も、しばしば悉多太子に對抗して居りましたが、出家の後も常に良くない事を企てゝは、釋尊の妨げになる事ばかりいたしました。或年、橋賞彌に安居中の事でありました。他の弟子達は厚き供養を受けたのに、提婆はこれに加はりませんでした。それを恥辱として憤り、學びたる神

通力を以て、王舍城主頻婆娑羅王の太子、阿闍世を説得して、其の供養を受け、伽耶山に一つの精舎を建立せしめ、自ら此所に居りました。かくて釋尊の漸く老體に向はるゝより、代りて自ら新佛となり、大衆を統御せんことを企て、竹林精舎に詣り、此の事を釋尊に請ひましたけれども、もとより御許しがありませんので、伽耶山に歸りて自ら弟子を集め、僧伽を組織していよく釋尊に反抗することになりました。

その企てと申しますのは、阿闍世太子に薦めて、父なる頻婆娑羅王を弑して王位に即かしめ、自ら釋尊を除きて之に代らうといふのであります。依つて先づ一醉象を放ちて釋尊を害せんとし、次には兇人に意を含めて亡ぼさんとし、更に山麓を行歩せる釋尊に、大石を落下して殺し奉らんとするなど、いろく

手段を講じましたけれども、いづれも功を奏しませんでした。かくて又僧伽の和合を破らんとして、大衆を誘惑し、釋尊に強請し、離間中傷、あらゆる悪計をめぐらしましたが、凡て水泡に歸りましたので、遂に不逞の比丘五百人を誘致して、伽耶山に邪見の法幢を建てました。

かゝる間に、阿闍世王の歸佛あり、又舍利弗目連の來りて衆を説き、翻邪歸正せしむるあり、事すべて志と違ひましたので、九箇月の後には、遂に悶死して身を終りました。玄奘三藏西遊の時、祇園精舍廢址の東偏に、提婆が生身のまゝ墮獄せる深坑を見たりと記されてあります。

(3) 琉璃王

琉璃王は、舍衛國波斯匿王の子で、母は勝鬘夫人であります。勝鬘夫人は、

迦毘羅衛國王摩訶男の庶子で、賤婢の産むところでありましたが、才色ありし爲めに、波斯匿王より請はれて、其の第一夫人となりました。時に詐りて釋迦種の女と稱し、入興せられたのであります。琉璃太子長するに及び、武藝修行の爲めに、迦毘羅衛城に赴かれた。時に釋迦種族の人々は、賤女の生むところなりとて輕侮いたしました。琉璃太子は忿恨の情禁する能はず他日王となるの時、必ず此の恨みを報せんと決意しました。

釋尊成道第四十年の頃の事であります。波斯匿は、長行といふ大臣を伴ひ、出で、佛所に詣り、説法を聞いて居られましたが、大臣の長行は、豫てより琉璃太子の異圖を抱けるを知り、潜かに歸りて太子に勧め、勝鬘行雨の二婦人を追ひ兄の逝多を弑し、王位を篡奪せしめました。此に於て琉璃王は漸く宿縁を

報ずるの時到来りと爲し、兵を出して迦毘羅衛城を攻め、一族五百人を虐殺して、哀れ釋尊の故國を滅亡に歸せしめたのであります。

けれども、兵を收めて僅かに七日の後には、琉璃王も亦非業の最後を遂げ、國を擧げて摩揭陀國阿闍世王の配下に歸してしまつたのであります。

一四 佛身病あり

(一) 入滅の宣言

世尊毘舍離を去りて、竹芳邑に至りたまふに、かの地饑饉にして、大衆止まり難し。すなはち阿難をして、國內の大衆を集めしめ、これに告げられた。

この地饑饉なり、汝等部を分ちて行き、毘舍離及び越祇聚邑に到りて安居すべし。汝等當に知るべし。善を得るも喜ぶなく、惡を得るも憂ふるなく、身を支ふるの食を取りて、敢て美を求むる勿れ。たゞ嗜味を愛し求むるが故に、生死絶えざるなり。

かくて阿難と獨り留まりたまふに、後の夏安居中に於て、佛身に疾ひあり、擧體皆痛む、すなはち自ら思念せられました。

我れ今疾ひ生じて、擧身痛み甚だしきも、諸弟子皆在らず。當に精勤自ら力めて、以て壽命を留むべし。

すなはち室外に出で、逍遙せられました。阿難佛所に詣りて白す。

今尊顔を見たてまつるに、疾ひあるが如し。世尊の疾みたまふや、我が心惶懼す。氣息未だ絶えたまはざるに當りて、願はくば衆弟子に敎命を垂れたまへ。

世尊、阿難に告げたまはく。

衆僧我れに於て須つごころあるか。もし我れ衆僧を持す、我れ衆僧を攝すも、自ら言ふものあらば、かゝる人こそ、衆に於て教令あるべきも、如来は、我れ衆僧を攝すといはず、恒に大衆中にありて、衆と相違遠しとせず、豈衆に對して教令あるべけんや。

阿難よ、我が所説の法、内外既に訖り、前後の所説、皆衆の所に在り、たゞ精進にこれを行ふべきのみ、妙法身長へに存す、何ぞ我が身を用ぬん。

我れ年老ひ、まさに八十ならんぞす。舊車を修治して僅かに存するを得べきが如し。我が身も亦方便力を以て、すこしく壽命を留むるを得べきのみ。この故に、阿難よ、當に自ら歸依し、法に歸依すべし、他に歸依するなかれ。自ら歸依し、法に歸依して、他に歸依するなかれとは、身受心法の四處に於て、精勤に之を觀じて懈らず、憶念して忘れず、以て世の食憂を除くをいふ。

阿難よ、我れ留まること久しからず、後三月にして大般涅槃すべし。阿難よ、我が滅度の後、能くこの法を修行するものあらば、即ち眞の我が弟子なり。

(2) 最後の供養

世尊は、それから波婆城の閻頭園に至られました。こゝに工師の子淳陀といふがありました。世尊を迎へて説法を聞き、信心歡喜して、飯食を設け、世尊及び大衆を請じて、御供養まをしあげました。そしてこれが、世尊御在世中に於ける、最後の供養となつたのであります。そこで世尊は、阿難に仰せつけられました。

佛の初めて成道せる時に食を施す者と、佛の滅度に臨む時に食を施す者と二者の功德、正に等しくて異なるなし。汝今往いて彼に語れ『淳陀よ、我れ親しく佛より聞き親しく佛の教へを受く、汝が供養は、大利を獲、大果報を得ん』と。

阿難すなはち彼所に至りて、淳陀に世尊の教旨を傳へました。

世尊座より起ちて、小しく前行し、一樹下に至られました。時に世尊の顔貌
從容として、威光熾盛に、諸根清淨にして、面色和悦にわたらせられました。
阿難見たてまつりて、自ら思念すらく。

我れ佛に侍するを得てより二十五年、未だ曾て佛の面色光澤の明淨なること、今の如きを見ず。
即ち世尊に向ひ、何によりて然るかを問ひたてまつりました。世尊告げたまふ
やう

二の因縁あつて、如來の光色常に異なる。一には初めて道を得て、無上正覺を成する時。二に
は性命を捨て、般涅槃せんとするに臨む時。阿難よ、この二縁を以て、光色常に異なる。

世尊、阿難を伴ひ、拘尸城に向ひたまふ。城に入りて阿難に告げたまはく

汝、如來の爲に、娑羅雙樹の間に於て、牀座を敷置し、頭を北にして、面を西に向はしめよ。然
る所以は、我が法流布して、久しく北方に住すべければなり。

世尊、四牒の僧伽梨の上に、右脇に偃臥して、獅子王の如く、足を累て臥した
まふ。かくて阿難に告げたまはく

汝、拘尸那竭城に入りて、諸の力士に告げよ、諸賢當に知るべし、如來は、夜半、娑羅園雙樹
の間に於て、般涅槃したまふべし。汝等往いて、疑ふ所を諮問して、教誡を受くべし、宜く時
に及ぶべし。後に悔ゆる勿れ。

阿難、世尊の教へを受けて、一比丘と共に、涙を垂れて城中に入り、五百の力
士が、集りて一處にあるを見る。力士いふ

不審し、尊者、此の暮時に於て、何によりてか來りたまへる。

我れ、汝等を饒益せんが爲に來るのみ。如來、夜半に、般涅槃したまはん。汝等往いて、疑を諮
問し、面のあたり、教誡を受けよ。時及ぶべし、後に悔ゆる勿れ。

力士これを聞きて、宛轉地にたをるゝこと、大樹の根抜けて枝條の摧折するが

如し。同じく聲を擧げていふ

佛の滅度を取りたまふ、何ぞそれ駛きや、群生長へに寢へ、世間の眼滅す。

止めよ、止めよ、悲しむなかれ、天地萬物、生じて終らざるなし。有爲をして常に存せしめんさす

るも、此のこそほりあることなし。佛のたまはずや、合會には離あり、生は必ず盡くこと。

力士等、各舎に歸り、諸の眷屬を將て雙樹の間に詣り、世尊を禮して申さ

く

唯願はくば世尊、壽を住めにまふこと一劫、もつて一切の諸天人民を利益したまはんことを。

世尊、力士等に告げたまはく

汝等、今この請ひを我れになすべからず。一切諸行は、皆悉く無常なり。合會せるものは、必ず別離に歸す。もし我れ世に住まること尙ほ一劫なるも、また必ず滅すべし。我が所説の法をたゞ

憶持し、誦念し。忘るゝことなかるべし。これ即ち我が世にあるに異らざるなり。

一五八 滅

(1) 最後の弟子

須跋陀羅といふ一人の外道がありました。年百二十。聰明多智にして、四吽陀を誦し、一切の書論、通達せざる無く、世の爲めに崇敬せられて居りました。今や釋尊、將に入滅せられんとすと聞き、自ら心に思ふやう。

諸の書論に説く、佛の出世は極めて遭ひ難きこと、優曇鉢花の、時に一たび現るゝが如しこと。

我れに疑ひあり、試みに往いて請問せん。釋尊若し能く我が疑ひを決せば、すなはち是れ實に

一切種智を得たるなり。

かくて佛所に至り、林外に於て阿難を見、その意を世尊に通せんことを請ひました。時に阿難は、世尊が、接待已に久しくして、疾ひの重きを増せるに、

今またこの外道と相見て言論したまは、更に重きを加へんことを恐れ、須跋陀羅に答へました。

世尊今四大不和にして、極めて心痛を苦しみ給ふ。入滅の時に臨みて、障礙をなす勿れ。

須跋陀羅更に三たび請ひ、阿難の三たび答ふるところ、また今の如くでありました。

時に世尊、この問答を聞き、須跋陀羅の道を求むる心を觀そなはして、阿難に告げられた。

阿難よ、我が最後の弟子に於て、獨り留むることなす勿れ。須跋陀羅の、我が前に來るを聽せ。我れ見んと欲す。此の人、我れを見んと欲するは、疑難を決せんが爲なり。來りて勝負を論ぜんが爲にあらず。

須跋陀羅、世尊の許したまへるを聞き、歡喜踊躍して、自ら勝ふる能はず。

心に念言しました『世尊は、決定して、一切種智を得たらん』と。乃ちすゝみて佛前に至り、白しました

世尊よ、我れ問ふところあらんと欲す。今世間の沙門、婆羅門、外道、六師等の各自ら一切智と言ひて、餘の學者を以て邪見と爲し、自の所業を解脱道といひて、他の行を以て生死の因と爲し、互に是非す。云何ぞ其の虚實を知るを得ん。何の師か、沙門の稱を得べき。何の行か、これ解脱の因ぞ。

時に世尊、須跋陀羅に告げられました。善哉、善哉、すなはち能く我れに是の如きの義を問へり。諦かに聽け、我れ汝が爲めに説かん

諸法の中、若し八聖道の法あるを見ずんば、當に沙門の名ある無きを知るべし。既に沙門なくんばまた解脱なし。既に解脱なくんば、一切種智にあらず。

須跋陀羅よ、若し諸法中、八聖道の法あらば、當に沙門の名あるを知るべし。沙門の名あれば、解

脱あり。既に解脱あれば、一切種智あり。

須跋陀羅よ、我れ王宮にありて、未だ出家せざりし時、一切世間は、皆六師の迷醉するところなり、未だ沙門の實あるを見ざりき。我れ年二十有九にして、出家學道し、三十有六にして、菩提樹下に於て、八聖道を思ひ、源底を究竟して、無上道を成り、一切種智を得、すなはち波羅奈國鹿野苑中、仙人の住處に往きて、阿若憍陳如等、五人の爲に、四諦の法輪を轉じ、彼等に道跡を得せしめたり、その時、始めて沙門あり、世間に出で、衆生を濟度したり。

須跋陀羅は、聞き已りて心に歡喜を生じ、渴仰して、八聖道の義を聞かんことを願ひました。世尊爲に正見、正思惟、正語、正業、正名、正精進、正念、正定の八聖道に就て、廣説せられました。須跋陀羅、聞きて心開明し、豁然として悟るところあり、佛法に於て、出家せんことを願ひしに、世尊之を聽されました。かくて阿難に告げたまはく

阿難よ、當に知るべし。我れ菩提樹下に無上道を成り、最初の説法に、阿若憍陳如等五人を度し、今日娑羅林中に在りて、涅槃に臨める最後の説法に、須跋陀羅を度し、諸天人民の、また更に我が説法を聞きて、度を得べきものなし、若し善根ありて、解脱を得べきものには、當來の我が弟子展轉して相教へん。

阿難よ、須跋陀羅は、これ外道と雖も、その善根の成熟せることを、唯如來のみ、能く分別して知れり。我が入滅の後、若し外道ありて、我が法に於て出家を求むることあらば、汝等便ち之を聽許すべからず、先づ四月の間、經典を讀誦せしめ、その心性の虛なるか實なるかを觀じ、我が法中に於て、實に深く樂むところあるを見て、然る後に、方に其の出家を聽すべし。然る所以は、汝等の小智、衆生の根を分別すること能はざるを以てなり。

時に須跋陀羅、佛に白していはく『我れさきに出家を求めし時、世尊若し先づ佛法に於て、四十年中、經典を讀誦せよ然る後に聽さんと言ひたまはく、我

れまた能く爾せしならん況んや四月をや』と。かくて須跋陀羅は、世尊の入滅を見るに忍びずとて、世尊に先立ち、身を終つたといふことであります。

(2) 入 滅

世尊今や將に涅槃に入りたまはんとして、寂然聲なき中夜に於て、最後に諸弟子の爲に、法要を説きたまふた。

汝等比丘よ、我が滅後に於ては、たゞ戒を尊重すること、闇に光を見、貧しきもの、寶を得るが如くせよ、戒はこれ汝等が大師なり、戒だにあらば、我れ世にあるに異ならず。戒はこれ正しく解脱に順ふの本なり、諸の禪定を生ずるも、皆この戒による。この故に諸の比丘よ、ひさへに淨戒を持てば、こゝに善生すれども、若し淨戒なければ、諸善功德皆生ずるを得ず、されば、たゞ戒の中に、安穩あり、功德ありさ知るべし。

汝等比丘、五根を制すべし。これを放逸にして、五欲に入らしむるなかれ。譬ば牧牛の人の、杖を執りて之を制し、縱に人の苗稼を犯さしめざるが如くせよ。若し五根を縱にすれば、五欲のみにあらず、涯畔なくして、制すべからざるこそ、轡を以て制せざる惡馬の、人を牽きて坑陷に墜するが如し。惡馬の害は、その苦一世に止まるも、五根の賊禍は、その殃ひ累世に及び、害を爲すこそ甚だ重し、慎まざるべからず。故に智者はこれを制して、放逸ならしめず。五根は心を主と爲す、汝等當に心を制すべし。心の畏るべきは、毒蛇、惡獸、怨賊、大火も噓とするに足らず、急に之を挫きて放逸ならしめされ、この心を縱にすれば、善事を亡ぼし、これを一處に制すれば、事として辨ぜざるなし。この故に比丘勤めて精進して、汝が心を折伏すべし。

汝等比丘、悲惱を懷くことなかれ。自利利他の法、皆既に具足しぬ。久しく世に住するも、更に益するところ無けん。天上人間中、度すべきものは皆悉く已に度し、未だ度せざるものは、皆また已に得度の因縁を爲しぬ。今より後、我が諸の弟子、展轉して之を行ぜば、すなはち如來の法身常に在りて滅せざるなり。

世は皆無常なり、會へば必ず離る。徒らに憂惱を懐かず、勤めて精進して、早く解脱を求め、以て別離せざる處に到るべし。世に牢固なるもの無し、此の身はこれ苦を盛るの器なり。没して老病死の大海中に在り、應に捨つべき罪惡の物なり。之を除滅するを得て、誰か歡喜せざらん。

諸行無常 是生滅法

生滅々已 寂滅已樂

汝等放逸を爲すなかれ、我れ不放逸を以ての故に自ら正覺を致せり。無量の衆善も、また不放逸によりて得らる。

汝等よろしく勤行精進して、速かに生死の火坑を離れんことを求むべし。これはこれ如來末後の所説なり。我が入滅、その時已に至る。

かくて大聖釋尊は、大涅槃に入られたのでありました、茲に諸の弟子衆は、嗚咽悲號し、共に叫びました。

世間の眼滅する、一に何ぞ速かなる。一切衆生は、今より後誰をか導師とせん。人天まさしに滅して、惡道日に増さん。

時に五百の弟子と共に波婆國より來りて、將に半途に在る大迦葉の來着を待ち、遺身を閣緒したてまつり、遺骨をば八分し、八個國の大王、各搭建して供養したてまつりました。

以上の編輯につき、常盤博士の『佛傳集成』并に安井廣度師の『佛教婦人』に負ふところ多し、記して茲に敬意を表す。

大聖...

...

...

昭和二年七月十五日印刷
昭和二年七月二十日發行

定價金七十錢
送料金六錢

不許複製

著作者 脇谷 篤謙

發行者 清水 精一郎

印刷者 須磨 勘兵衛

京都市油小路通御前通上ル
京都市北小畑新町西入

發行所 振替大版 興教書院

京都市油小路御前通上ル

振替大版 一〇八一五番

312
251

脇谷 撫謙 著

蓮如上人を憶ふ

送金 壹料 八 錢圓

眞宗概説

送金 壹料 六 錢圓

親鸞聖人の信仰

送金 五料 四拾 錢錢

終

